

秋 田 市

長 岡 遺 跡

下新城西部地区県営扫一手育成基盤整備事業
に 伴 う 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書

2002.3 秋田市教育委員会

秋 田 市

長 岡 遺 跡

下新城西部地区県営担い手育成基盤整備事業
に 伴 う 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書

2002.3 秋田市教育委員会

序

本書は、秋田市下新城長岡地内に所在する長岡遺跡の発掘調査報告書です。

秋田県秋田総合農林事務所による下新城西部地区県営担い手育成基盤整備事業の予定地が長岡遺跡にかかることから、このたび緊急発掘調査を実施しました。

調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡や溝跡、河川跡などが発見され、地域の歴史を考える上で貴重な成果を得ることができました。

本報告書はその調査結果をまとめたものであり、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

刊行にあたり、発掘調査の実施と報告書作成にご指導、ご協力いただきました関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

秋田市教育委員会

教育長 飯 塚 明

目 次

序

例言・凡例

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査期間と体制	1
3. 調査の経過	4
4. 遺跡の位置と地形・地質	4
5. 周辺の遺跡	4

第Ⅱ章 調査の記録

1. 調査の方法	6
2. 基本層序	7
3. 発見遺構と出土遺物	11

第Ⅲ章 まとめ

49

第Ⅳ章 長岡遺跡のテフラ分析

53

写真図版

55

報告書抄録

例　　言

1. 本報告書は秋田市下新城長岡字前谷地・外脇・中沖地内に所在する長岡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査・整理作業は、秋田市教育委員会文化課が行った。
3. 本報告の執筆と作成は、伊藤武士・神田和彦・小野隆志が行った。本文執筆分担は、第Ⅰ章1・2・3、第Ⅲ章を伊藤武士、第Ⅰ章4・5、第Ⅱ章1・2・3の遺物を神田和彦、第Ⅱ章3の遺構を小野隆志が担当し、編集は伊藤武士が行った。
4. 第Ⅳ章は、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析を依頼した。
5. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる。(順不同・敬称略)
秋田県生涯学習課文化財保護室、大野憲司、藤澤昌、武藤祐浩、王琦、魏文斌、高橋学、平川南、今泉隆雄、三上喜孝、新井重行、村木志伸、菅原祥夫、高橋照彦、尾野善裕、土橋理子、平尾政幸

凡　　例

1. 第1、2、3図では図の上方を真北にあわせ、それ以外では方位は磁北を示している。
2. 遺物の実測図の縮尺はそれぞれ示した。写真図版に関しては、土器・陶磁器は約1/3、鉄製品・石器・銭貨は約1/2である。
3. 遺物番号は、土器・陶磁器・瓦・木製品・鉄製品・石器・銭貨の分類ごとにそれぞれ通し番号をつけた。
4. 古代の土器の名称は、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所の分類に基づく。赤褐色土器は成形にロクロを使用し、酸化炎焼成、非内黒の土器を指す。
5. 土器の断面を黒くぬりつぶしたもののが須恵器である。
6. 土器の性格や利用状況の相違は下記のスクリーントーンで表現した。



7. 調整技術、切り離し等の文章標記は以下のとおりである。
 - 成形とケズリ調整については、非ロクロの場合に明記し、ロクロを使用した場合には明記しない。
 - ミガキ調整、刷毛目調整については非ロクロを前提とし、非ロクロの場合明記せず、ロクロを使用した場合は明記した。
 - ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整はロクロ利用のカキ目調整と記載した。
 - 切り離し、粘土紐、叩き痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整は、「軽い撫で調整」、成形時痕跡の消滅を目的とした器面調整を「ていねいな撫で調整」と記載した。
 - 赤褐色土器の甕については、ロクロ成形を基本とし、部分的に非ロクロ成形であったとしても、特に明記しない。

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

秋田県秋田総合農林事務所は、秋田市下新城長岡・中野・吉崎・小友地区一帯の水田に下新城西部地区県営担い手育成基盤整備事業を予定し、秋田市教育委員会と埋蔵文化財に関する事前協議を行い、平成12年10月30日付けで秋田市教育委員会に埋蔵文化財の事前調査を依頼した。

秋田市教育委員会文化課が平成12年11月28日から12月2日にかけて分布調査及び試掘調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である「長岡遺跡」近接地で、遺物包含層や柱穴、土坑等の遺構等を検出によって、「長岡遺跡」の範囲が拡大し、その広がりが事業予定地内に該当することが確認された。

秋田県秋田総合農林事務所と秋田県教育委員会、秋田市教育委員会との協議の結果、事業予定地の変更等は困難で、一部は計画変更により保護するものの、計画変更が不可能な部分については発掘調査による記録保存を行う方針となった。平成12年12月25日に「長岡遺跡」範囲確認調査を実施し、発掘調査面積を確定した。

秋田県秋田総合農林事務所は、平成13年度の事業実施に伴い平成13年2月16日付けで秋田県教育委員会へ埋蔵文化財発掘を通知（法57条3第1項）し、3月5日付け教生-3164で秋田県教育委員会より周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について発掘調査を条件とする通知を受けた。

通知を受け、平成13年度内の発掘調査実施のため、秋田県秋田総合農林事務所と秋田市の間で発掘調査委託契約が取り交わされ、秋田市教育委員会文化課が「長岡遺跡」の発掘調査を実施することとなった。

2. 調査期間と体制

調査期間 平成13年5月8日～8月13日

調査面積 2,750m²

事業主体者 秋田県秋田総合農林事務所

調査主体者 秋田市教育委員会

調査担当者 秋田市教育委員会文化課

調査体制 秋田市教育委員会文化課

課長 小松正夫

課長補佐 日野久

文化財担当

主査 安田忠市（調査担当）

文化財保護主事 伊藤武士（調査担当）

文化財保護主事 中川宏行（調査担当）

文化財保護主事 神田和彦（調査担当）

文化財保護主事 小野隆志（調査担当）

調査作業員 鈴木銀一、鈴木末藏、三浦吉司、齊藤健三、

佐々木昇三、長尾景元、渡辺範、五十嵐正、

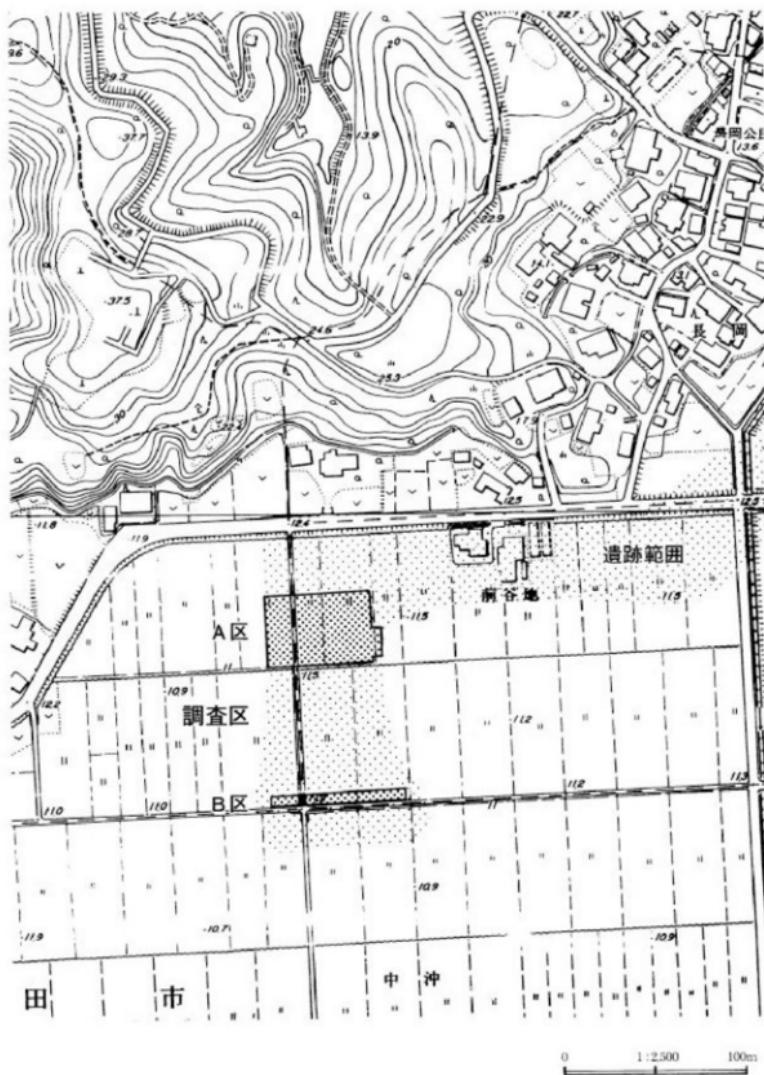
高田義憲、宮田トキ子、鈴木博子、宇佐美ヨシエ、

宇佐美きよ、安田和子、佐藤ノリ子、佐藤夏子

整理作業員 渡辺範、大井重樹、宮田トキ子、鈴木博子



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区周辺の地形

3. 調査の経過

発掘調査は平成13年5月8日から8月13日まで実施した。5月8日、調査範囲を設定し、調査を開始した。重機による表土除去作業を開始した（5月16日まで）。5月15日、機材を搬入し、作業員がに入る。5月17日、グリッド設定及びレベルの移動を行った（5月23日まで）。5月23日、南側B区より掘り下げ、遺構調査を開始した。6月14日、B区全景写真撮影。6月15日、B区平面実測を開始し（6月22日まで）、並行して北側A区の掘り下げ、遺構調査を開始した。7月27日、A区平面実測を開始する。8月11日遺跡全景写真撮影及びバルーンによる上空からの写真撮影を行った。その後、機材撤去。8月13日、補足調査を終え調査を終了した。

4. 遺跡の位置と地形・地質（第1・2図）

長岡遺跡は、秋田市北西部、北緯39°48'11"、東經140°4'35"、秋田市下新城長岡字前谷地・外脇・中沖地内に所在する。遺跡から約7km南の高清水丘陵には、古代城柵官衙遺跡の秋田城跡（註1）が所在し、約3km東の新城川上流には、上新城丘陵に点在する古代須恵器窯の新城窯跡群（註2）が所在する。

秋田市下新城地区は標高60～200mの上新城丘陵の西端にあたり、新城川の沖積作用による新城川低地を擁し、西には天王砂丘地が南北にのびる地形である。上新城丘陵の地質は、第三紀中新世の暗灰色泥岩（船川層）や鮮新世に属する青色砂質シルト岩（笠岡層）・青灰色泥岩（天徳寺層）などからなっている（註3）。遺跡は秋田平野北部を東から西に流れる新城川中流域、標高約11mの沖積地（新城川低地）に所在し、遺跡北側の丘陵（上新城丘陵）の裾部にあたる。平成12年度に行った事前調査の結果から、旧地形では丘陵線辺部に近い北側は微高地であり、南側は低湿地、溝沼が広がっていたと考えられる（註4）。昭和25年頃に行われた圃場整備により削平・埋め立てされ、現在は水田となっている。

5. 周辺の遺跡（第3図）

秋田市教育委員会が昭和61年から63年に実施した「秋田市遺跡詳細分布調査報告書」（註5）に基づいて、長岡遺跡周辺の古代の遺跡について概観する。

長岡遺跡が隣接する上新城丘陵の裾部には、追分駅東遺跡（5）、熊野田遺跡（13）、竹子山I遺跡（16）、竹子山II遺跡（17）、松ノ下I遺跡（20）、松ノ下II遺跡（21）、蚕沢遺跡（22）が所在しており、上新城丘陵の裾部には古代の遺跡が集中している。また、長岡遺跡の南に広がる新城川低地には、乳倉遺跡（8）、鳩下り遺跡（10）、雀島遺跡（9）、佐戸反遺跡（12）が所在し、古代の遺跡が島状に点在している。

（註1）秋田市教育委員会「昭和47年～平成12年度 秋田城跡発掘調査概報」 1973～2001年

（註2）上法香苗「秋田市上新城の古代窯跡群について」『秋田考古学』7 pp.6～10 1975年

伊藤武士「大沢窯跡I遺跡の須恵器について」『秋田考古学』44 pp.26～43 1994年

「秋田城跡周辺須恵器窯の動向について」『秋田考古学』46 pp.2～35 1998年

（註3）経済企画庁「土地分類基本調査 地形・表層地質・土壤－秋田－5万分の1」 1966年

（註4）秋田市教育委員会「秋田県秋田市市内遺跡詳細分布調査報告書」 2001年

（註5）秋田市教育委員会「秋田県秋田市 遺跡詳細分布調査報告書」 1989年



番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺 横・遺物
1	金足農高遺跡	秋田市金足追字分子海老穴	遺物包含地	縄文	縄文土器(後期)
2	潟向Ⅲ遺跡	秋田市金足小梶字潟向	遺物包含地	弥生	弥生土器
3	耳取Ⅰ遺跡	秋田市下新城長岡字耳取	遺物包含地	弥生	弥生土器
4	耳取Ⅱ遺跡	秋田市下新城長岡字耳取	遺物包含地	縄文	縄文土器
5	追分駁東遺跡	秋田市下新城長岡字毛無谷地	遺物包含地	縄文・食糞・平安	縄文土器・石器・須恵器・赤褐色土器
6	羽黑神社宝鏡印塔	秋田市下新城中野字前谷地	宝鏡印塔	中世	宝鏡印塔(塔身・笠)
7	街道塙西遺跡	秋田市下新城中野字街道塙西	遺物包含地	平安	赤褐色土器
8	乳童遺跡	秋田市下新城中野字乳倉	遺物包含地	奈良・平安	須恵器・土師器
10	嶋下り遺跡	秋田市下新城中野字嶋下り	遺物包含地	奈良・平安	須恵器・土師器
9	安島遺跡	秋田市飯島字安島	遺物包含地	奈良・平安	土師器
11	笠岡館	秋田市下新城笠岡字堀場	城館	中世	郭・壁郭・帯郭・空堀
12	佐戸反遺跡	秋田市下新城笠岡字佐戸反	遺物包含地	平安	須恵器・土師器・赤褐色土器
13	熊野田遺跡	秋田市下新城長岡字熊野田	遺物包含地	南宋・平安・中世	石器・須恵器・土師器・赤褐色土器
14	長岡館	秋田市下新城長岡字長岡	城館	中世	主郭・腰郭・帯郭
15	施館	秋田市金足塙崎字施館	城館	中世	石庭・須恵器
16	竹子山Ⅰ遺跡	秋田市金足塙崎字稻船	遺物包含地	縄文・食糞・平安	石庭・須恵器・土師器
17	竹子山Ⅱ遺跡	秋田市金足塙崎字稻館	遺物包含地	奈良・平安	須恵器・赤褐色土器
18	梵天長裡遺跡	秋田市金足塙崎字ニッ森	遺物包含地	縄文	縄文土器
19	青崎遺跡	秋田市下新城青崎字寺沢	遺物包含地	縄文	縄文土器
20	松ノ下Ⅰ遺跡	秋田市金足吉田字松ノ下	遺物包含地	奈良・平安	須恵器・赤褐色土器
21	松ノ下Ⅱ遺跡	秋田市金足吉田字松ノ下	遺物包含地	奈良・平安	須恵器
22	臺沢遺跡	秋田市下新城小友字臺沢	遺物包含地	縄文・食糞・平安	縄文土器・須恵器・土師器
23	稚館	秋田市下新城小友字範館	城館	中世	郭・帯郭・段築
24	岩城館	秋田市下新城岩城字下向	城館	中世	主郭・郭・帯郭・空堀・土壘・堅壁・特殊窓・中世陶器盤・開光墨書き
25	福城寺宝鏡印塔	秋田市下新城岩城字下向	宝鏡印塔	中世	宝鏡印塔(塔身)
26	福城寺罇井財天碑	秋田市下新城岩城字下向	板碑		石碑

第3図 長岡遺跡と周辺の遺跡

第Ⅱ章 調査の記録

1. 調査の方法

調査を進めるにあたり、調査対象区に一区画 $4\text{m} \times 4\text{m}$ のグリッドを設定した(第4図)。グリッドの南北軸は磁北に対応させ、南北軸に直交する東西軸を設定した。したがって、本報告書の遺構図面の北は磁北を示している。なお、長岡遺跡が所在する北緯 39° 、東経 140° では磁北は真北に対して約 $8^{\circ}10'$ 西偏している。南北軸に算用数字、東西軸に2文字アルファベットを付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。

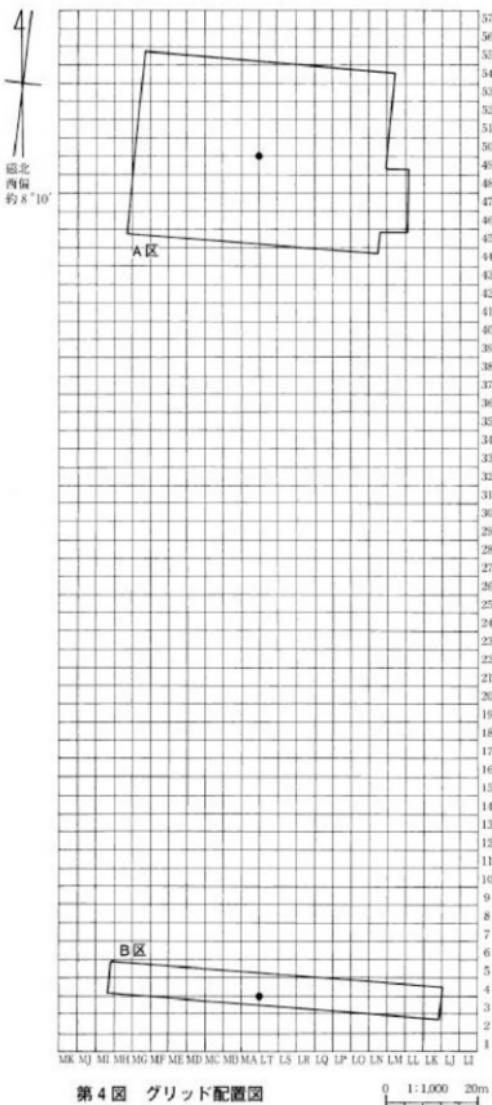
調査区は大きく分けて2地区あり、北側をA区(南北 40m ×東西 54.5m +拡張区・約 63m^2)、南側をB区(南北 7m ×東西 72.5m)とした。A区とB区の間に埋蔵文化財が包蔵されているが、工事の計画変更により、保護されることから調査は実施しなかった。南北軸のMAラインをセンターラインとして、A区のMA50、B区のMA4を各区のセンター杭として使用した。

遺物の取り上げは、グリッド名・層位名を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録し取り上げた。

遺構の平面図・断面図、土層断面図は $1/20$ の縮尺で作成した。

写真は 35mm 版のカメラを用いた。

遺物は $55\text{cm} \times 34\text{cm} \times 15\text{cm}$ のコンテナで37箱である。遺物は洗浄・接合・注記作業を行い、実測図を作成した。



第4図 グリッド配置図

2. 基本層序

長岡遺跡では、A区の南西側やB区の1号河川跡において多数の層の重複がみられた。A区、B区のそれぞれの層位についてまとめると以下のようになる（第5～6図）。

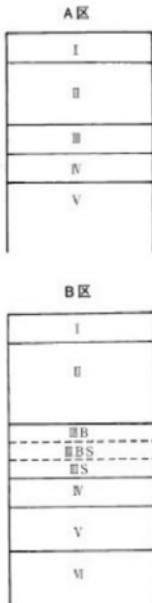
A区

- 第I層 （表土・耕作土）暗褐色土に黒色土が混じる。水田の耕作土である。
- 第II層 （造成土）暗褐色、褐灰色、灰褐色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる。圃場整備による造成土である。造成土の違いは圃場整備の時期差を示している可能性がある。
- 第III層 （整地層）黒褐色土に炭化物が混じる。古代の整地層である。南東部から南側中央部にかけて堆積している。しまりは強い。
- 第IV層 （自然堆積層）暗緑灰色土に炭化物が混じる。柵内区西側の湿地跡に堆積した自然堆積層である。
- 第V層 （地山粘土層）青灰色粘土の地山層である。

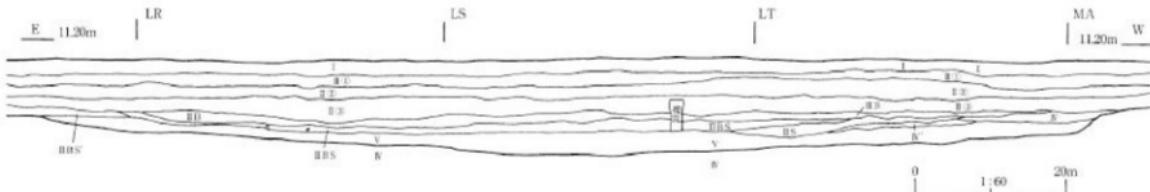
B区

- 第I層 （表土・耕作土）暗褐色粘質土に黒色土が混じる。水田の耕作土である。
- 第II層 （造成土）褐灰色、黒褐色、黒色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる。圃場整備による造成土である。造成土の違いは圃場整備の時期差を示している可能性がある。
- 第III層 （自然堆積層）第III層～第V層は1号河川跡及びその周辺に堆積した層である。第III層は、自然堆積層であり3つに細分される。

- ・第III B層 黒褐色土に植物遺体が若干混じる。また、第II層起源の灰白小礫を若干含む。1号河川跡の最上位に堆積した層であり、1号河川跡全体を広範囲に覆っている。
 - ・第III B S層 黒褐色土に植物遺体が混じる。窪地状になる1号河川跡中央部にレンズ状に堆積している。また、1号河川跡南東部には、第III B S層と連続する形で、比較的粘性の強い第III B S'層が堆積している。
 - ・第III S層 黒褐色砂質土に植物遺体が多量に混じる。1号河川跡南西部にのみ堆積している。
- 第IV層 （整地層）灰褐色土に植物遺体が若干混じる。しまりは強い。1号河川跡西岸に部分的に堆積している。古代の整地層である。また、1号河川跡南西部には、第IV層と連続する形で、粘性の強い第IV'層が堆積している。
- 第V層 （自然堆積層）黒褐色砂質土に植物遺体が多量に混じる。厚く堆積し、古代の土器・木製品が多量に出土した。
- 第VI層 （地山粘土層）青灰色粘土の地山層である。



第5図 基本土層柱状図

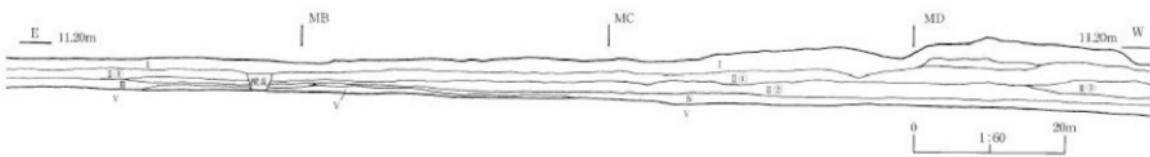


A区南壁土層断面中央部付近

- 第 I 層（表土・耕作土）暗褐色土に黒色土が混じる
- 第 II ① 層（造成土）褐色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる
- 第 II ② 層（造成土）暗褐色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる
- 第 II ③ 層（造成土）黒色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる
- 第 III B 層（自然堆積層）黒褐色土に植物遺体が若干混じる
- 第 III B-S 層（自然堆積層）黒褐色土に植物遺体が若干混じる
- 第 III B-S' 層（自然堆積層）黒褐色土に植物遺体が混じる

- 第 IV 層（整地層）風化褐色土に植物遺体が若干混じる
- 第 V 層（整地層）風化褐色土に植物遺体が若干混じる
- 第 VI 層（自然堆積層）黒褐色砂土に植物遺体が若干混じる
- 第 VII 層（堆山）青灰色粘土

-1-



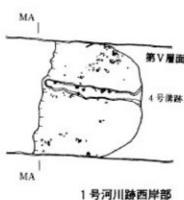
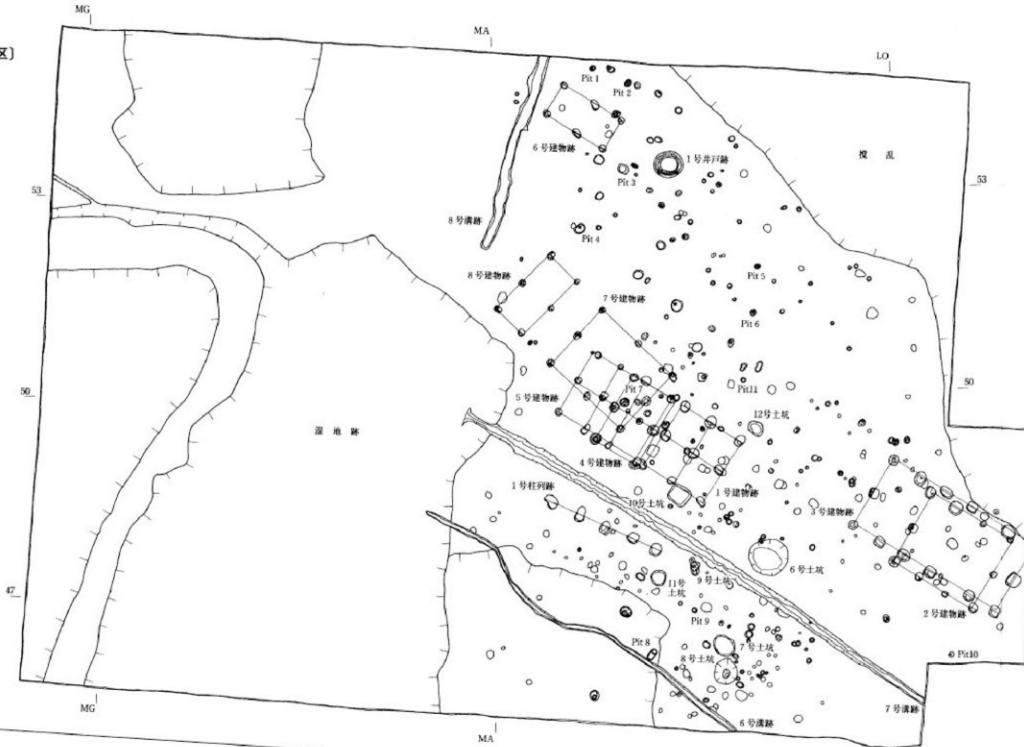
A区南壁土層断面中央部付近

- 第 I 層（表土・耕作土）暗褐色土に黒色土が混じる
- 第 II ① 層（造成土）暗褐色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる
- 第 II ② 層（造成土）褐色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる
- 第 II ③ 層（造成土）灰褐色土に径1～2cmの灰白色の小礫が混じる

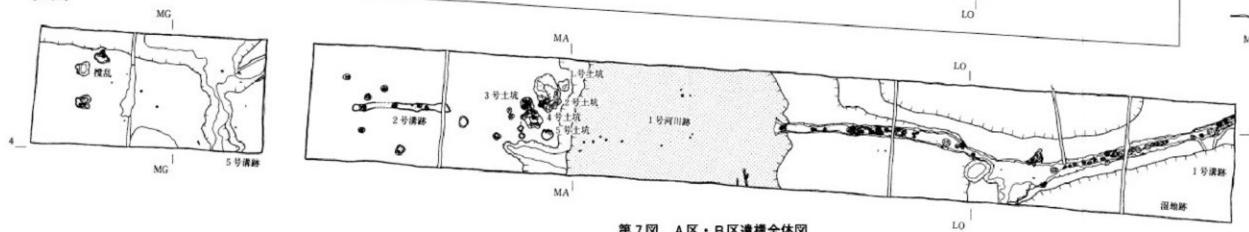
- 第 III 層（整地層）黒褐色土に炭化物が混じる
- 第 IV 層（自然堆積層）暗褐色土に炭化物が混じる
- 第 V 層（堆山）青灰色粘土

第6図 A区・B区土層断面図

[A区]



[B区]



第7図 A区・B区遺構全体図

3. 発見遺構と出土遺物

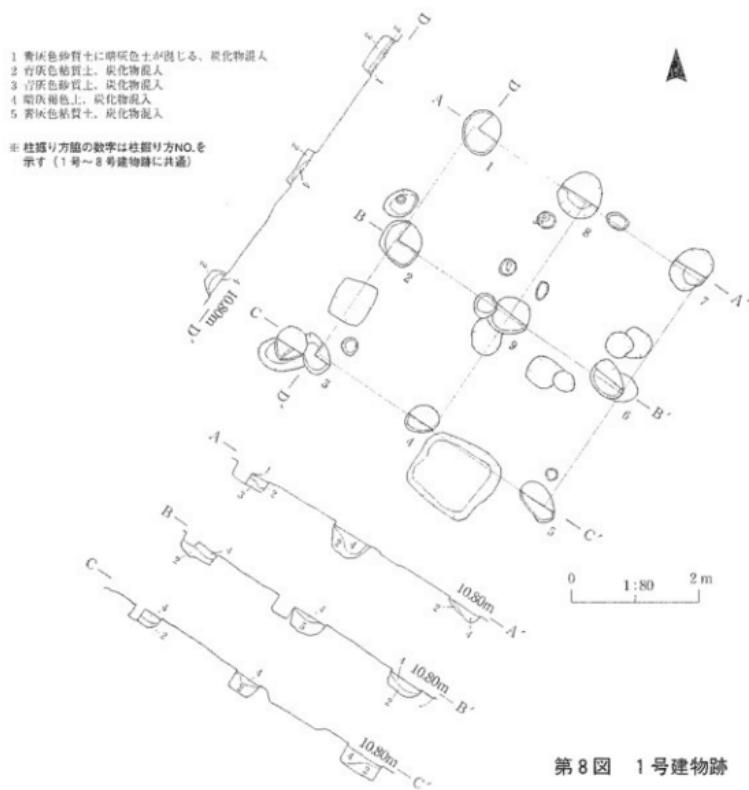
A 区の発見遺構と出土遺物

1号建物跡（第8図 図版7）

A区中央部の第V層地山面より検出された総柱東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（2.1m+2.1m）、桁行2間（2.1m+2.1m）で、建物方位は桁行が西で約34度北に振れている。柱掘り方は長軸60~75cm、短軸40~65cmの円形または楕円形で、深さは15~35cmである。全ての柱掘り方が抜き取りが行われている。4号、5号建物跡と重複し、4号建物跡よりも新しく5号建物跡よりも古い。

1号建物跡出土遺物（第28図-1 図版24-1）

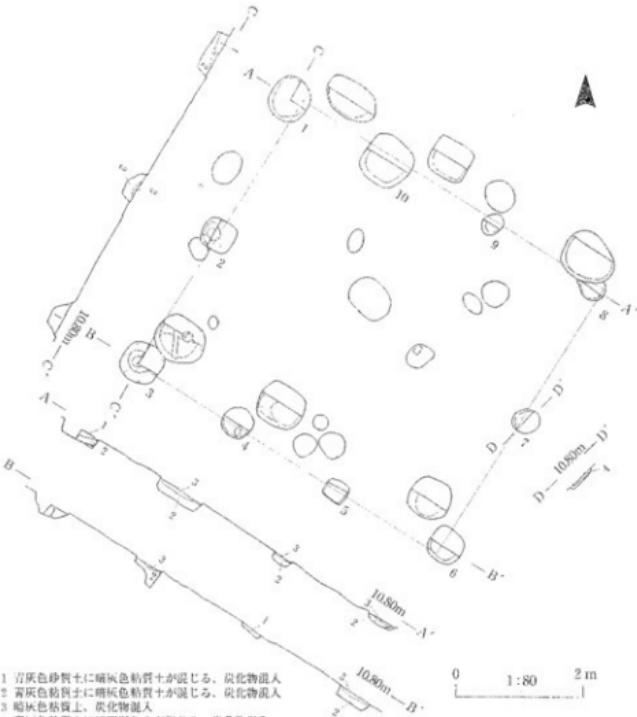
須恵器（1）：No.2柱掘り方の埋土出土で、底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した坏である。



第8図 1号建物跡

2号建物跡（第9図 図版8~9）

A区東部の第V層地山面より検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（2.4m+2.4m）、桁行3間（1.8m+1.8m+1.8m）で、建物方位は桁行が西で約32度北に振れている。柱掘り方は長軸37~75



第9図 2号建物跡

cm、短軸30~75cmの円形または隅丸方形で、深さは5~30cmである。No.3柱掘り方から柱材と考えられる木材が出上している。木材は直径15cmの丸太材である。それ以外の掘り方では柱材の抜き取りが行われている。3号建物跡と重複し、これよりも古い。

2号建物跡出土遺物（第28図-2~5 図版24-2~5）

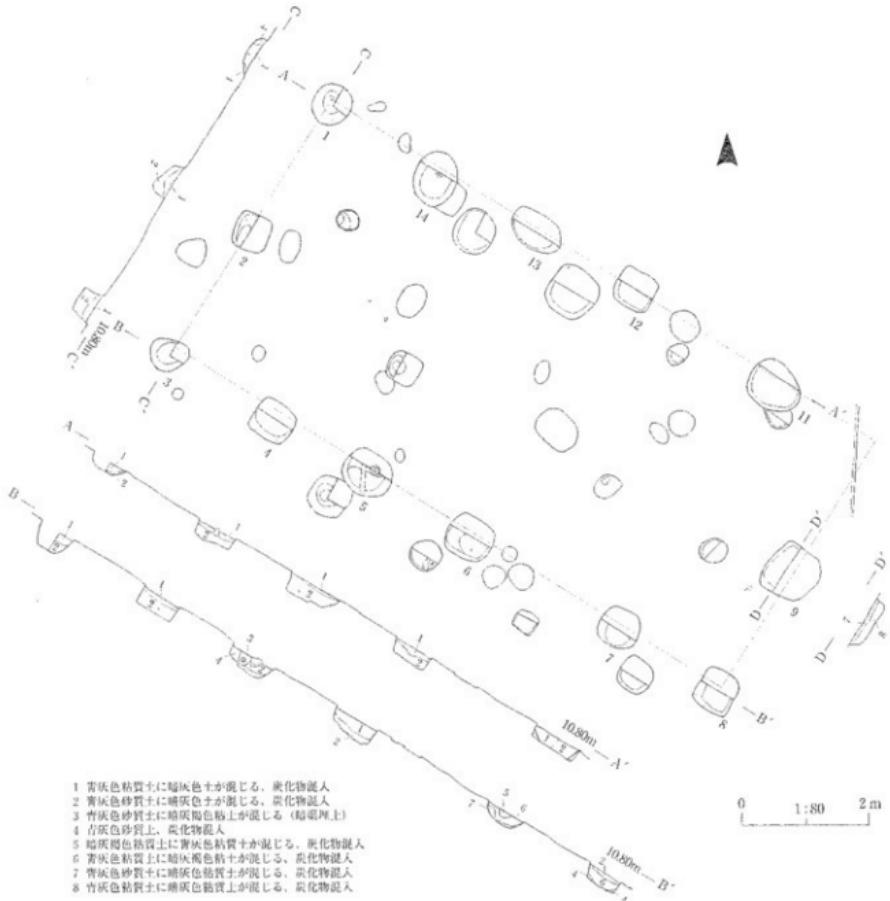
2、4、5は抜き取り埋土、3は埋土出土であり、2はNo.9柱掘り方、3はNo.3柱掘り方、4、5はNo.4柱掘り方から出土している。

須恵器（2）：底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した壺の底部破片である。

土師器（3~5）：3~4は壺の口縁部破片、5は壺の頸部破片である。いずれも外面には、1~2本の横走沈線がみられる。3と5の内面は横方向の刷毛目調整を施す。3は口縁部端面に刷毛目調整後、横方向の撫で調整を施す。4の内面は摩滅により不明である。

3号建物跡（第10図 図版8~9）

A区東部の第V層地山面より検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（2.25m+2.25m）、桁行5間（1.8m+1.8m+1.8m+2.7m+1.8m）で建物方位は桁行が西で約33度北に振れている。柱掘り方は長軸50~87cm、短軸50~80cmの円形、楕円形または隅丸方形で、深さは19~35cmである。No.5、14



第10図 3号建物跡

柱掘り方では柱材が遺存しており、No.3 柱掘り方理土から柱材と考えられる木材が出土している。それ以外の掘り方では柱材の抜き取りが行われている。2号建物跡と重複し、これよりも新しい。

3号建物跡出土遺物（第28図-6 図版24-6）

須恵器（6）：No.14柱掘り方の埋土出土で、底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施し、台周縁に撫で調整を施した台付坏である。この他に、柱掘り方より赤褐色上器片が出土している。

4号建物跡（第11図 図版10）

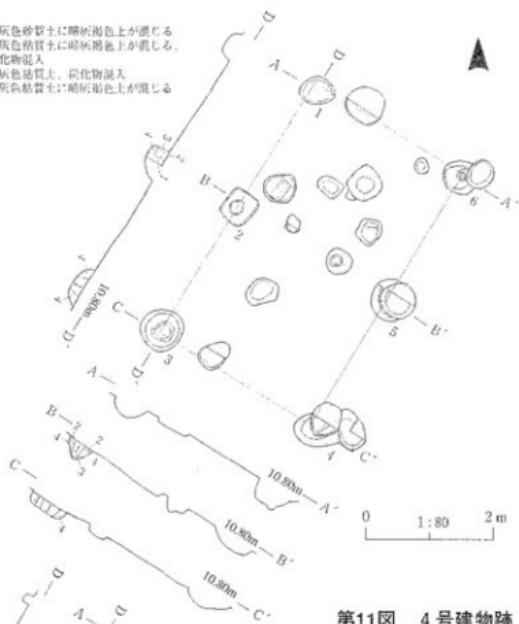
A区中央部の第V階地山面より検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（2.7m）、桁行2間（2.25m+2.25m）で、建物方位は梁間が西で約32度北に振れている。柱掘り方は長軸50~70cm、短軸45~65cmの円形または楕円形と隅丸方形で、深さは15~30cmである。No.2、3柱掘り方で直径20cmの柱痕跡が認められる。1号、5号建物跡と重複し、1号、5号建物跡よりも古い。7号建物跡と位置的に重

複するが、切り合ひ関係はない。

5号建物跡（第12図 図版11）

A区中央部の第V層地山面より検出された総柱東西棟の建物跡である。梁間2間（2.1m+2.1m）、桁行3間（1.8m+1.8m+2.1m）で、建物方位は桁行が西で約33度北に振れている。柱掘り方は長軸24~62cm、短軸35~55cmの円形または楕円形で、深さは3~20cmである。ほとんどの柱掘り方で柱材の抜き取りが行われているが、No.6柱掘り方から柱材と考えられる木材が出土している。木材は一辺13cmの角材である。埋土からは赤褐色土器片が出土している。1号、

- 1 青灰色砂質土に暗灰褐色土が混じる
- 2 吉田色粘土に暗灰褐色土が混じる、炭化物混入
- 3 青灰色粘土上、炭化物混入
- 4 吉田色粘土上に暗灰褐色土が混じる



第11図 4号建物跡

- 1 暗灰褐色粘土、炭化物若干混入
- 2 吉田色粘土に暗灰褐色土が若干混じる

第12図 5号建物跡

4号建物跡と重複し、1号、4号建物跡よりも新しい。7号建物跡と位置的に重複するが、切り合い関係はない。

6号建物跡（第13図 図版12）

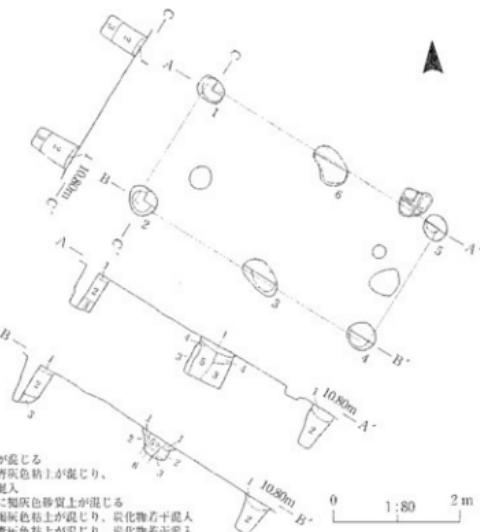
A区北部の第V層地山面より検出された東西棟の建物跡である。梁間1間（2.1m）、桁行2間（2.1m+2.1m）で、建物方位は桁行が西で約33度北に振れている。柱掘り方は長軸40~49cm、短軸35~43cmの円形または梢円形で、深さは30~70cmである。No.3、6柱掘り方では直径約25cmの柱痕跡が認められるが、それ以外では抜き取りにより柱痕跡は不明である。

6号建物跡出土遺物

(第28図-7 図版24-7)

須恵器（7）：No.2柱掘り方の抜き取り埋土出土で、底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した坏である。

- 1 暗褐色粘土上に
青灰色砂質土が混じる
- 2 黒褐色粘土に青灰色粘土が混じり、
炭化物若干混入
- 3 吉灰色砂質土に褐色砂質土が混じる
- 4 青灰色粘土上に褐色砂質土が混じり、炭化物若干混入
- 5 黑褐色粘土上に青灰色粘土が混じり、炭化物若干混入
- 6 青灰色砂質土に黒褐色粘土が混じり、炭化物若干混入



第13図 6号建物跡

- 1 暗褐色粘土に褐色砂質土が混じる、炭化物混入
- 2 褐褐色粘土上に吉灰色砂質土が混じる、炭化物混入
- 3 黑褐色粘土、炭化物が多く混入
- 4 喀灰褐色粘土上に吉灰褐色粘土が混じる、炭化物若干混入
- 5 喀灰褐色粘土、新作かい
- 6 吉灰褐色砂質土に喀灰褐色粘土が混じる

第14図 7号建物跡



7号建物跡（第14図 図版10）

A区中央部の第V層地山面より検出された東西棟の建物跡である。梁間2間（2.25m+2.25m）、桁行2間（2.85m+2.85m）で、建物方位は桁行が西で約45度北に振れている。柱掘り方は長軸40~52cm、短軸35~52cmの円形または隅丸方形で、深さは18~40cmである。No.3柱掘り方で直径約19cm、No.4柱掘り方で直径約13cmの柱材が遺存している。柱材は丸太材である。それ以外の掘り方では柱材の抜き取りが行われている。4号、5号建物跡と位置的に重複するが、切り合い関係はない。

8号建物跡（第15図 図版13）

A区中央部の第V層地山面より検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（2.25m）、桁行2間（2.25m+2.25m）で、建物方位は梁間が西で約46度北に振れている。柱掘り方は長軸35~50cm、短軸30~40cmの円形または隅丸方形で、深さは16~30cmである。すべての柱掘り方で柱材の抜き取りが行われている。

8号建物跡出土遺物

(第28図-8~9 図版24-8~9)
いずれも抜き取り埋土出土であり、8はNo.6掘り方、9はNo.3掘り方から出土している。

土師器（8）：壺の口縁部破片である。外面は段状となる3本の横走沈線、内面は横方向の刷毛目調整を施す。

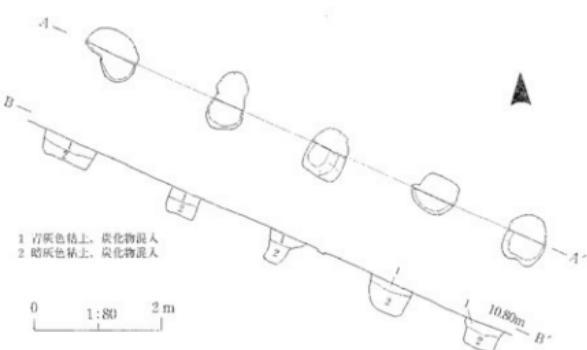
赤褐色土器（9）：底部回転糸切り無調整の壺である。外面体部下半に煤状炭化物が付着している。

1号柱列跡（第16図 図版14）

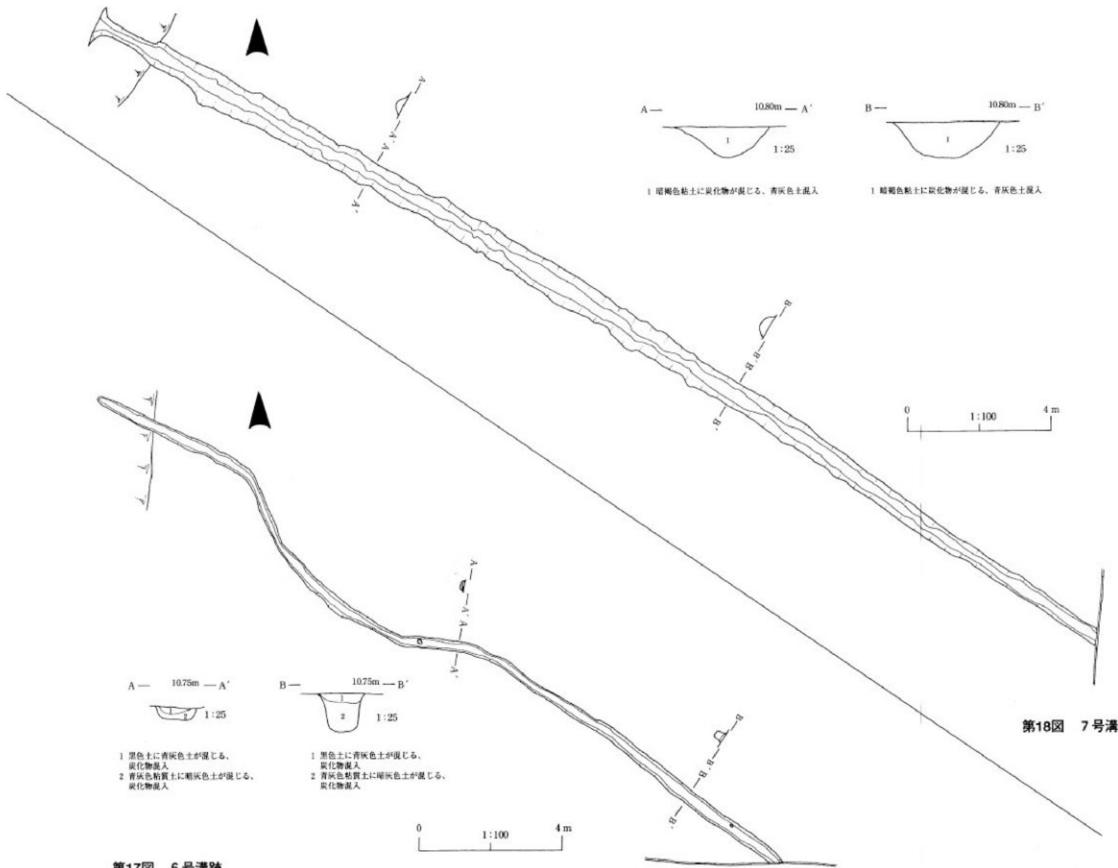
A区南東部で第V層地山面より検出された柱列跡である。5基の柱掘り方よりなる東西方向の柱列で、方向は西で約24度北に振れている。柱間間隔は1.8m+1.7m+



第15図 8号建物跡



第16図 1号柱列跡



第17図 6号溝跡

第18図 7号溝跡

1.8m + 1.5mである。柱掘り方は直径50~65cmの円形または方形で深さは35~60cmである。全ての掘り方に柱材の抜き取り跡が認められ、全体的な抜き取りが行われている。土師器片が出土している。

6号溝跡（第17図 図版17~18）

A区中央部から南東部にかけて、第V層地山面より検出された溝跡である。幅20~40cm、深さ4~20cmである。溝の方向は西で約28度北に振れており、湿地跡から南東方向に延び、南へ蛇行した後は西で36度北に振れ、調査区外へ延びる。

6号溝跡出土遺物（第28図-10~11 図版24-10~11）

いずれも埋土出土である。

土師器（10）：内面黒色処理された台付塊である。底部切り離しは磨滅により不明であるが台周縁に撫で調整を施す。内面全面に漆が付着している。

赤褐色土器（11）：底部回転糸切り無調整の壺である。

7号溝跡（第18図 図版17~18）

A区中央部から南東部にかけて、第V層地山面より検出された溝跡である。幅40~100cm、深さ8~26cmである。溝の方向は西で約32度北に振れており、湿地跡から調査区外へ南東方向に延びる。溝の始まりは浅く、扇形を呈する。

7号溝跡出土遺物（第28図-12~23、第32図-1 図版24~25-12~23、図版28-1）

いずれも埋土出土である。

土師器（12~15）：12は底部から体部下半にかけてケズリ調整を施した塊である。外面は口縁部のみ横方向のミガキ調整、内面は縦方向のミガキ調整で黒色処理を施す。13は非ロクロ成形の高壺である。外面は縦方向のミガキ調整、内面はミガキ調整で黒色処理を施す。14は底部回転糸切り無調整の台付塊である。台周縁に撫で調整を施す。内面は縦方向のミガキ調整で黒色処理を施す。外面体部下半に軽い二次加熱痕がみられる。15は非ロクロ成形の壺の口縁部破片である。外面体部上半に縦方向の刷毛目調整、頸部から口縁部に横方向の撫で調整を施す。内面は横方向の刷毛目調整を施す。

赤褐色土器（16~23）：16~21は底部回転糸切り無調整の壺である。16には外面底面から体部下半にかけて二次加熱痕がみられる。20には外面体部下半から底部端面にかけて、21には内面全体と外面口縁部から体部上半にかけて二次加熱痕がみられる。22は底部回転糸切り無調整の皿である。底部は厚く擴高台風となっている。23は台付壺である。底部切り離しは磨滅により不明であり、内面全面に漆が付着している。

瓦（1）：平瓦の破片である。凸面には縄目の叩き痕がみられ、凹面には布目压痕が残る。凹面に粘土板の糸切り痕がみられ、一枚作りによるものであると考えられる。

8号溝跡（第19図 図版19）

A区北側の第V層地山面より検出された南北方向の溝跡である。幅55~95cm、深さ9~18cmである。溝の方向は北で約18度東に振れている。

8号溝跡出土遺物（第28図-24 図版25-24）

土師器（24）：埋土出土で、底部からの立ち上がりがゆるやかな壺である。底部切り離しは磨滅により不明である。外面は口縁部から頸部にかけて横方向のミガキ調整、内面は斜方向のミガキ調整で黒色処理を施す。

1号井戸跡（第20図 図版20）

A区北部の第V層地山面より検出された井戸跡である。平面形は長軸約180cm、短軸約155cmの円形である。ほぼ垂直に掘り下げられ、確認面から底部までの深さは190cm、底部は直径約90cmの円形となる。井側は検出されていないが、埋土より板状の木材等が出土しており、当初、井側を有していたが廃棄時に材の抜き取りが行われた可能性がある。なお、確認面近くで板材が検出されたが、遺構に伴うものであるかどうかは明確でない。また、底部付近の南側面で自然木が第V層地山中に入り込んで検出された。埋土から土師器片、赤褐色土器片が出土している。

1号井戸跡出土遺物（第54図-1 図版37-銭貨1）

銭貨（1）：埋土上層より出土した寛永通寶である。寛永通寶の分類では、古寛永（初鑄1636年～1659年にかけて鋳造）に該当する。

6号土坑（第21図 図版21）

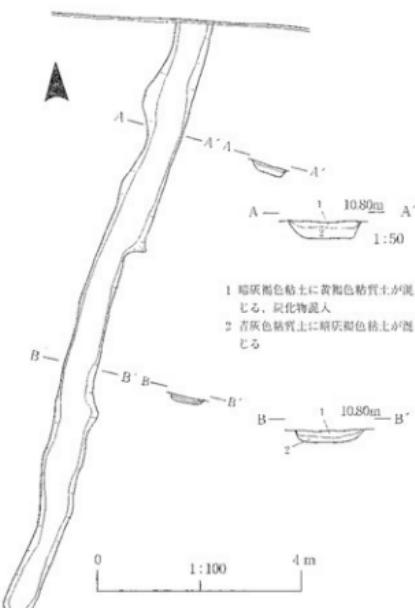
A区南東部の第V層地山面より検出された土坑である。長軸約240cm、短軸約220cmの円形で、深さは29cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、北側に小ピットを有する。

6号土坑出土遺物（第29図-25～29 図版25～25～29）

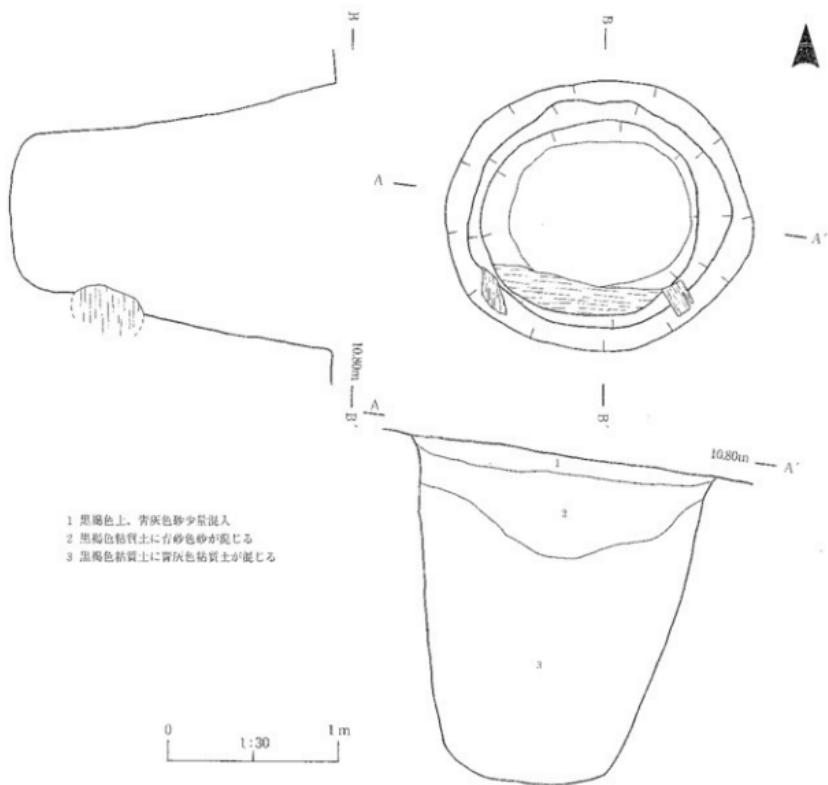
いずれも埋土出土である。

須恵器（25～26）：25～26は底部回転ヘラ切りの壺である。25は底部切り離し後、ていねいな撫で調整を施す。焼成は不良であり、色調はにぶい黄褐色を呈する。26は底部切り離し後、軽い撫で調整を施し、底部に判読不明の墨痕がみられる。

赤褐色土器（27～29）：27～28は底部回転糸切り無調整で、体部下端から下半にかけてケズリ調整のある壺である。29は壺である。内外面ともに、横方向のロクロ利用のカキ目調整を施す。口縁端部を小さくつまみ出している。



第19図 8号溝跡



第20図 1号井戸跡

7号土坑（第22図 図版22）

A区南東部の第V層地山面より検出された土坑である。長軸約140cm、短軸110cmの楕円形で、深さは10cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、南側に小ピットを有する。埋土第1、3層には炭化物が混入する。

7号土坑出土遺物（第29図-30~34 図版25-30~34）

いずれも埋土出土である。

土器（30）：底部回転糸切り無調整の台付皿である。台周縁に撫で調整を施す。内面の調整は磨滅により不明瞭である。外面体部下半から脚部・底部にかけて二次加熱痕がみられる。

赤褐色土器（31~32）：31は底部回転糸切り無調整の壺である。32は鍋である。内外面ともに口縁部から体部上半にかけて撫で調整を施し、体部下半には内面に平行の当て具痕、外面に平行の叩き目痕がみられる。内面体部下半は叩き締め後、撫で調整を施している。

陶磁器（33～34）：
33は白磁小塊の口縁部破片である。釉の色調は灰白色を呈している。
34は灰釉陶器の台付皿底部破片である。釉は、高台付近に部分的にみられる。底部切り離しは不明だが台周縁にていねいな撫で調整を施す。内面は転用碗として使用されている。

8号土坑

(第23図 図版22)

A区南東部の第V層地山面より検出された土坑である。長軸約150cm、短軸約145cmの円形で、深さは7～23cmである。中央にくぼみを有し、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土から赤褐色土器片が出土しており、埋土第1層には炭化物が混入する。

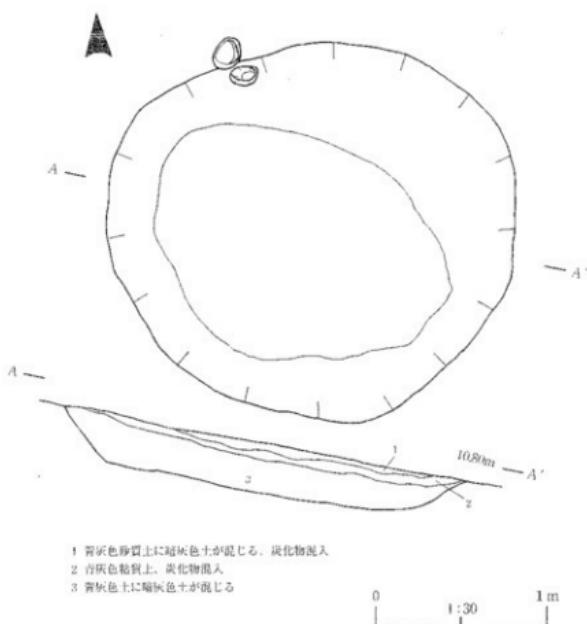
8号土坑出土遺物

(第29図-35～36 図版25～35～36)

いずれも埋土出土である。

須恵器（35）：円面鏡の破片である。脚部外面上に継方向の2本の沈線がみられる。

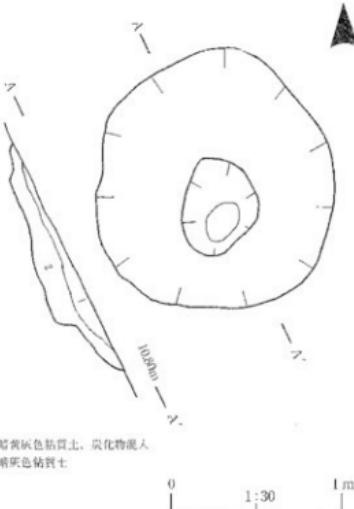
土師器（36）：非ロクロ成形の甕の口縁部破片である。外面に段状となる1本の横走沈線が施される。



第21図 6号土坑



第22図 7号土坑



第23図 8号土坑



第24図 9号土坑

9号土坑（第24図 図版22）

A区南東部の第V層地山面より検出された土坑である。長軸約90cm、短軸約85cmの円形で、深さは10cmである。壁は西側はゆるやかに立ち上がるが、東側では急である。埋土から土師器片、赤褐色土器片が出土している。

10号土坑（第25図 図版23）

A区中央部の第V層地山面より検出された土坑である。長軸約125cm、短軸約115cmの方形で、深さ15cmであり、壁はゆるやかに立ち上がる。南北方向に暗渠の掘り込みによる攪乱を受けている。1号建物跡と位置的に重複するが切り合い関係はない。

10号土坑出土遺物（第29図-37 図版25-37）

須恵器（37）：埋土出土で、底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した坏である。

11号土坑（第26図 図版23）

A区南東部の第V層地山面より検出された土坑である。長軸約110cm、短軸約60cmの不整形で、深さ15~58cmである。中央にピット状のくぼみを有し、



第25図 10号土坑

壁は急に立ち上がる。埋土から須恵器片、土師器片が出土している。

12号土坑（第27図 図版23）

A区東部の第V層地山面より検出された土坑である。長軸約100cm、短軸約75cmの楕円形で、深さ5cmである。壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は黒色で炭化物が混入しており、土師器片、赤褐色上器片が出土している。

その他の遺構（Pit）（第7図）

A区の第V層地山面から検出されたピットから柱材や礎板等が出土している。

Pit 1、4、5、6からは丸太材が出土している。Pit 1からは辺材で一辺9cm以上の角材、Pit 4からは芯材で直径14~18cmの面取りの粗い丸太材、Pit 5からは芯材で一辺10cmの角材、Pit 6からは芯材で直径15cmの丸太材である。

Pit 2、3、7、10からは礎板が出土している。Pit 7出土の礎板は縦36cm、横21cm、厚さ3.5cmで、片面が調整されており、その面が内側に反る。井戸枠材を転用した可能性がある。Pit 10出土の礎板は縦20cm以上、横20cm、厚さ6cmで、破損のため全体の形状は不明であるが、片面が調整されており、その面が内側に反る。井戸枠材（井筒）の転用と考えられる（図版37）。

A区中央南側のPit 8とPit 9からは土器が、A区中央のPit 11からは錢貨が出土しているが、これらの遺物については以下に述べる。

Pit 8出土遺物（第29図-38 図版25-38）

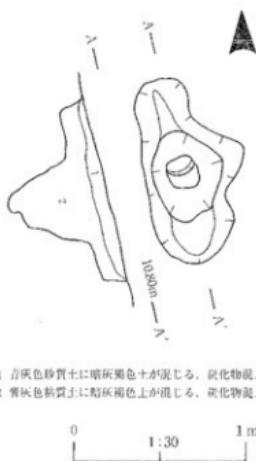
須恵器（38）：埋土出土で、底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した坏である。

Pit 9出土遺物（第29図-39 図版25-39）

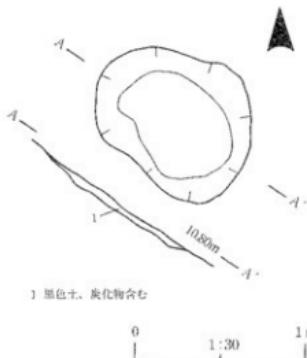
赤褐色土器（39）：埋土出土で、底部回転糸切り無調整の皿である。内外面ともに口縁部から体部上半にかけて煤状炭化物と二次加熱痕がみられる。

Pit 11出土遺物（第54図-2~3 図版37-錢貨2~3）

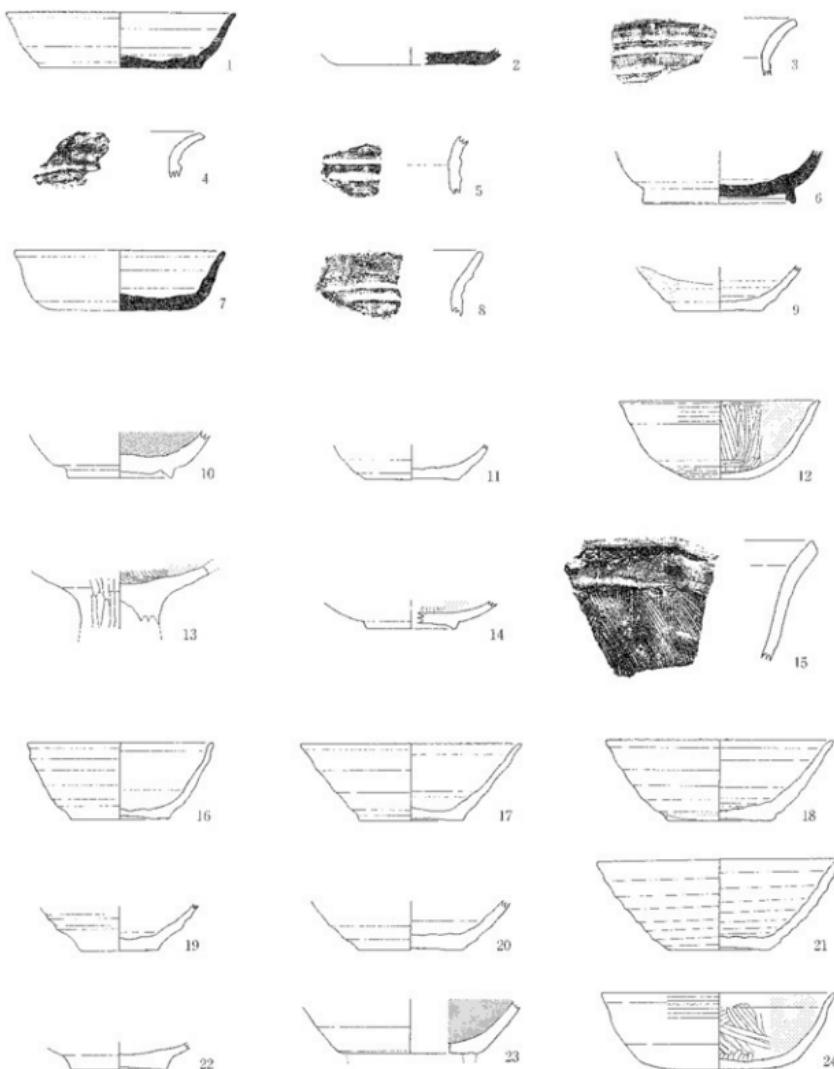
錢貨（2~3）：埋土より重なり合って出土した。2は洪武通寶（明・初鑄1368年）であるが、錢厚が薄く錢文も不鮮明で穿内に鑄張りが認められることから、模鑄錢の可能性がある。3は無文錢である。



第26図 11号土坑



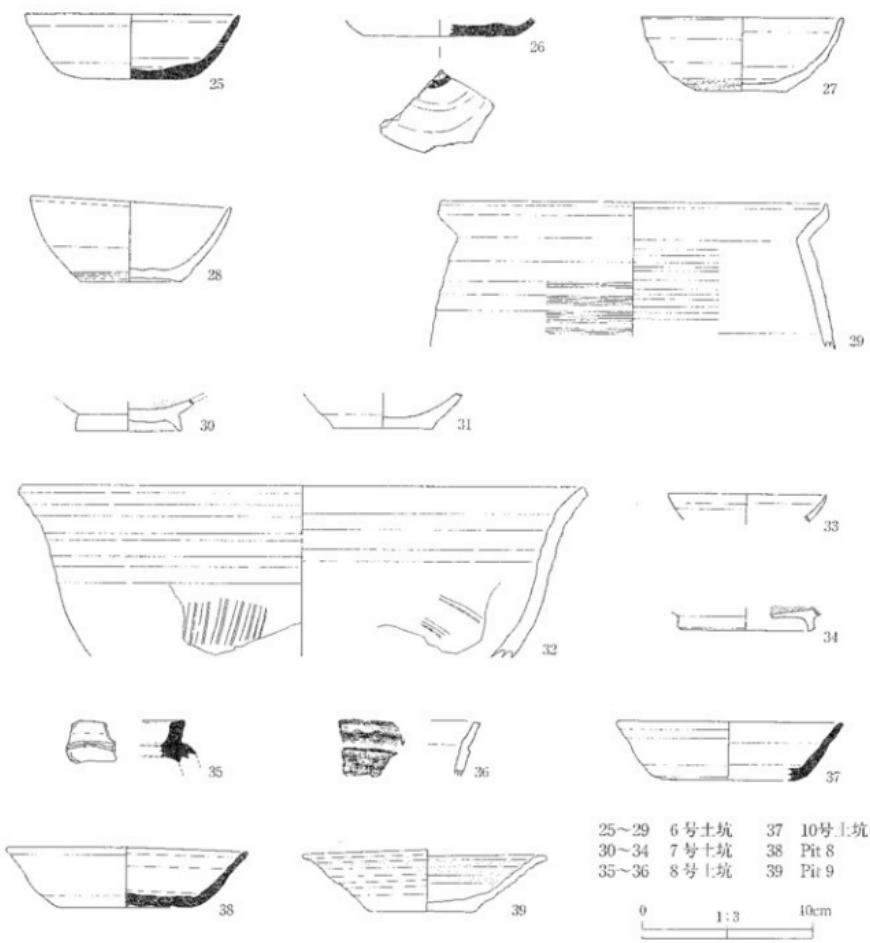
第27図 12号土坑



1	1号建物跡	8~9	8号建物跡
2~5	2号建物跡	10~11	6号溝跡
6	3号建物跡	12~23	7号溝跡
7	6号建物跡	24	8号溝跡

0 1:3 10cm

第28図 A区遺構内遺物（土器・陶磁器）①



第29図 A区遺構内出土物（土器・陶磁器）②

A区 遺構外出土遺物

A区 第I層（表土）出土遺物

（第30図-40、第53図-1、第54図-4 図版26-40、図版37-石器1、銭貨4）

磁器（40）：肥前系磁器の白磁丸皿である。蛇ノ目釉剥ぎを施しており、高台部分は無釉である。

石器（1）：珪質頁岩製の石箆である。基部は欠損している。厚手の測片を素材とし、周辺部に二次加工を施す。

銭貨（4）：寛永通寶である。寛永通寶の分類では、新寛永（初鑄1697年～1747年、1767年～1781年

にかけて鋳銭) に該当する。

A区 第II層(造成土)出土遺物 (第30~31図-41~63、第32図-2~8、第54図-5~7 図版26~27-41~63、図版28-2~8、図版37-銭貨5~7)

須忠器 (41~50) : 41は底部回転ヘラ切りの坏である。底部および体部下端にケズリ調整を施し、内面には漆が付着している。42は底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した坏である。43は底部回転糸切り無調整の坏である。44~45は底部回転糸切り無調整の台付皿である。いずれも台周縁に撫で調整を施す。46は天井部ヘラ切り後、ケズリ調整を施した蓋である。端部は屈曲して内傾する。つまみの形状は欠損しているため不明である。47~48は円面硯の脚部破片である。47では継方向の沈線3本と横方向の沈線1本、48では継方向の沈線4本と横方向の沈線1本がみられる。49~50は壺の体部破片である。いずれも外面は平行叩き目であり、内面は放射状當て具痕がみられる。

土師器 (51~53) : 51は台付皿である。高台および底部が著しく磨滅しているため、切り離しは不明である。外面は口縁部付近のみ横方向のミガキ調整を施し、内面は全面にミガキ調整し内面黒色処理を施す。52は非ロクロ成形の壺の口縁部破片である。外面は口縁部から頸部にかけて6本の横走沈線を施し、口縁端部にも浅く沈線状にくぼませている。内面は横方向の撫で調整を施す。53は非ロクロ成形の壺の底部である。底部は撫で調整、外面は継方向のミガキ調整を施す。胎土はやや粗い。

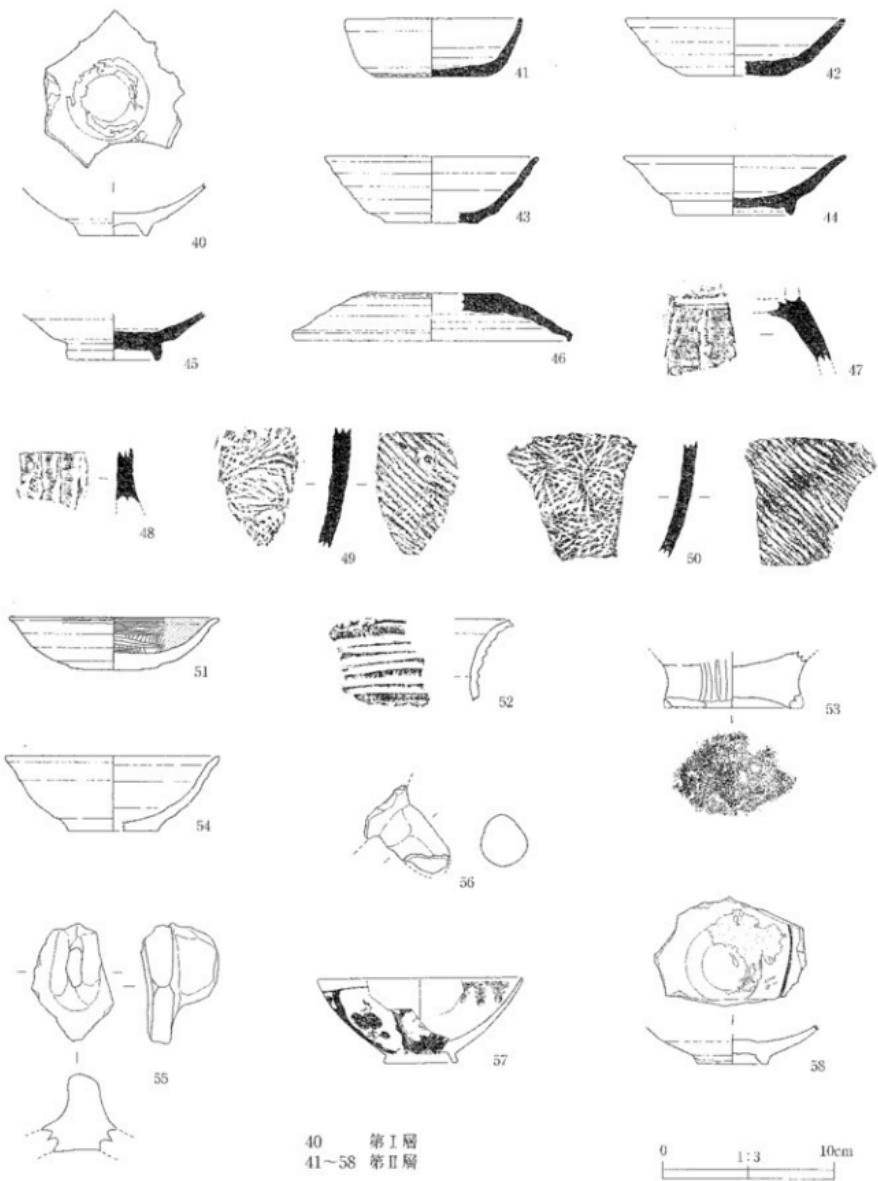
赤褐色土器 (54~56) : 54は底部回転糸切り無調整の坏である。55は双耳鉢の耳部破片と考えられる。焼成はやや甘く、胎土はやや粗い。56は鍋の脚部破片である。脚部先端は加熱により変色・剥落している。胎土はやや粗い。

陶磁器 (57~62) : 57は西洋コバルトを用いた銅板転写による磁器染付碗である。文様は鶴と亀である。58は肥前系磁器の染付丸皿で、文様は不明である。蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台部分は無釉である。59は肥前系(唐津系)陶器の灰釉丸皿である。釉の色調は暗オリーブ色を呈し、高台から体部下半は無釉である。60は肥前系(唐津系)陶器の銅緑釉小皿である。蛇ノ目釉剥ぎを施し、砂目積みの痕跡がある。61は肥前系(唐津系)陶器の銅緑釉中皿である。蛇ノ目釉剥ぎを施している。62は瀬戸・美濃系陶器の灰釉皿である。釉の色調はオリーブ灰色を呈し、文様は菊花の印花文である。

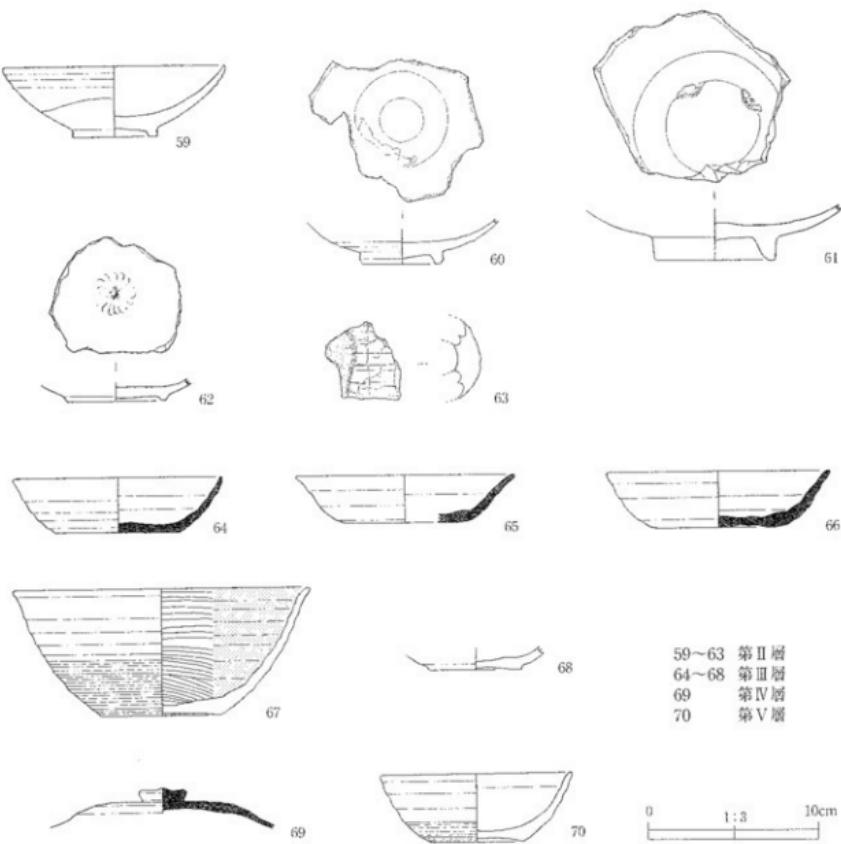
フイゴ羽口 (63) : フイゴ羽口の破片である。図の左側が先端部であり、ガラス質の溶解付着がみられる。

瓦 (2~8) : 2は平瓦の破片である。凸面には繩目の叩き痕がみられ、凹面には布目圧痕が残る。四面に粘土板の糸切り痕がみられ、一枚作りによるものと考えられる。3~4は丸瓦の破片である。3は凸面は繩目による叩き締め後、撫で調整を施し、凹面には布目圧痕を残す。4~5は凸面は撫で調整を施し、叩き締めの痕跡は不明である。凹面には布目圧痕を残す。4の焼成は良好であり堅緻である。6~8は格子目平瓦の破片である。いずれも凸面には格子目の叩き痕がみられ、凹面には布目圧痕を残す。6の焼成はやや軟質、7は良好であり、8は良好で堅緻である。また8には凹面に粘土板の糸切り痕がみられ、一枚作りによるものと考えられる。

銭貨 (5~7) : 5~7は寛永通寶である。寛永通寶の分類では、5~6は古寛永(初鑄1636年~1659年にかけて鋳銭)、7は新寛永の「文錢」(初鑄1668年~1683年にかけて鋳銭)に該当する。



第30図 A区遺構外出土遺物（土器・陶磁器）①



第31図 A区遺構外出土遺物（土器・陶磁器）②

A区 第III層出土遺物（第31図-64~68、第33図-9 図版27-64~68、図版28-9）

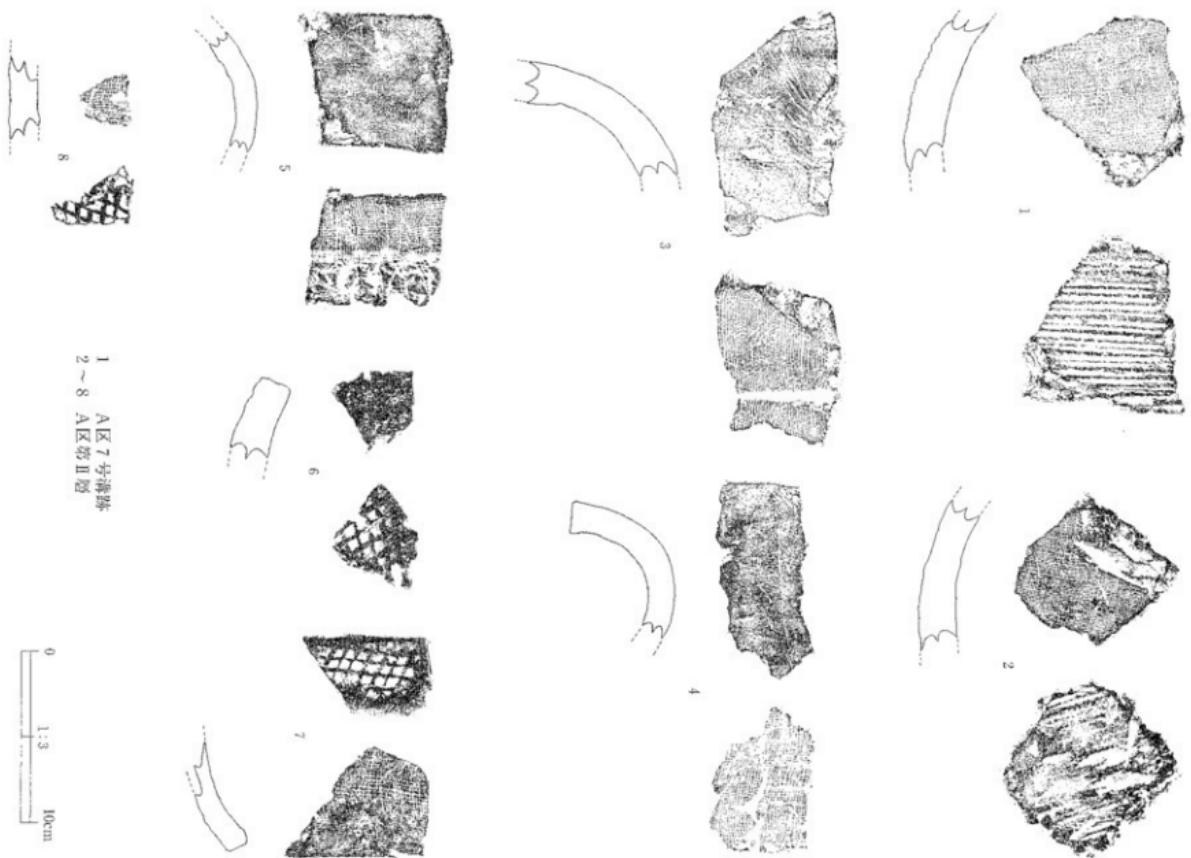
須恵器（64~66）：64~66はいずれも底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した坏である。65は口縁部がゆるやかに外反する。

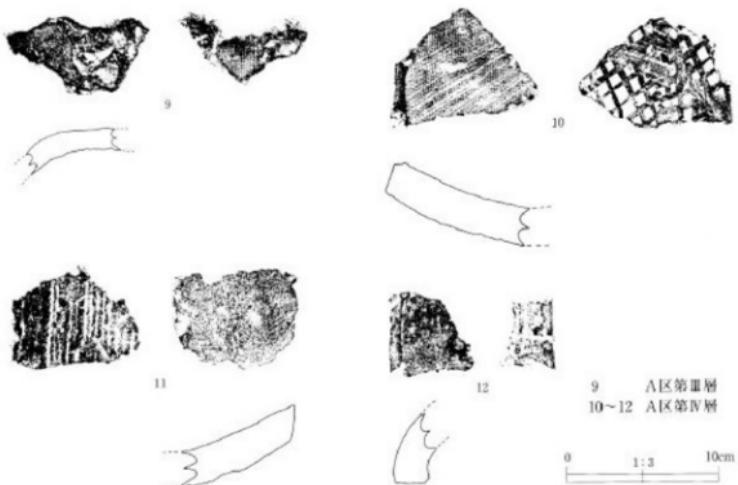
土師器（67）：底部回転糸切り無調整の塊である。外面は体部下半から下端にかけてケズリ調整を施す。内面は横方向のミガキ調整をし黒色処理を施す。内外面ともに口縁部から体部上半にかけて二次加熱痕がみられ、内面黒色処理はほとんど消えている。

赤褐色土器（68）：回転糸切り無調整の坏である。底部切り離しはやや雑である。

瓦（9）：丸瓦の破片である。凸面は撫で調整を施し、叩き締めの痕跡は不明である。凹面には布目状痕を残す。

第32図 出土遺物(瓦)①





第33図 出土遺物（瓦）②

A区 第IV層出土遺物（第31図-69、第33図-10~12 図版27-69、図版28-10~12）

須恵器（69）：天井部回転へラ切りの蓋である。つまみの形状は扁平なボタン状である。つまみ取り付け後でねいな撫で調整を施す。

瓦（10~12）：10~11は平瓦の破片である。10は凸面に格子目の叩き痕がみられ、凹面に布目圧痕を残す。また凹面端部を面取り加工しており、焼成は良好で堅緻である。11は凸凹の両面に撫で調整を施す。凸面は撫で調整前の縄目の叩き痕がみられる。12は丸瓦の破片である。凸面は撫で調整を施し、叩き締めの痕跡は不明である。凹面には布目圧痕を残す。また凹凸の両面の端部を面取り加工しており、焼成は良好で堅緻である。

A区 第V層（地山）直上出土遺物（第31図-70、第54図-8 図版27-70、図版37-銭貨8）

赤褐色土器（70）：底部回転糸切りの壺である。体部下半から下端にかけてケズリ調整を施す。

銭貨（8）：政和通寶（北宋・初鑄1111年）で、字体が篆書体のものである。

B区の発見遺構と出土遺物

1号溝跡（第34図 図版15）

B区東側から中央部にかけての第VI層地山面より検出された溝跡である。幅40~120cm、深さ7~23cmである。溝の方向は調査区外から確認範囲の中程までは西で約14度南に振れ、西南西方向に伸びる。そ

の後は西で約21度北に振れ、下流ではほぼ真西に方向を変えて、1号河川跡に流れ込む。下流部の埋土第1層からにぶい黄色の細粒（降下火山灰）が検出されている（「第Ⅳ章 長岡道路のテフラ分析」参照）。

1号溝跡出土遺物（第44図-71～73、第50図-1～2 図版29-71～73、図版35-1～2）

71と73は底面、72と木製品1～2は埋土出土である。この他に埋土から赤褐色土器片が出土している。

須恵器（71～72）：71は底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した台付壺である。台周縁は撫で調整を施す。72は長頸瓶の底部である。底面は砂底風になっており、台周縁は撫で調整を施す。

土師器（73）：底部回転糸切りの台付壺である。台周縁は撫で調整を施し、体部下半に条線状の調整を施す。

木製品（1～2）：1～2は棒状製品である。1は上端部に面取り加工があり、穿孔がある。下端部は欠損している。2は上端部に面取り加工、下端部は尖らせている。

2号溝跡（第35図 図版16）

B区中央部の第VI層地山面より検出された東西方向の溝跡である。幅35～55cm、深さ1～4cmである。溝の方向は西で約1度北に振れている。削平を受けているため流路の詳細は不明であるが、3号溝跡もしくは4号溝跡に連続する可能性がある。埋土から須恵器片、赤褐色土器片が出土している。

3号溝跡（第36図 図版16）

B区中央部の第IV層面より検出された溝跡である。幅30～110cm、深さ3～7cm、流路長約4.9mである。溝の方向は西で約15度北に振れており、東南東方向に延び、下流で幅を広げて1号河川跡に流れ込む。埋土から須恵器片、土師器片、赤褐色土器片が出土している。

4号溝跡（第37図 図版16）

B区中央部の第V層面より検出された溝跡である。幅40～80cm、深さ3～12cm、流路長約5.9mである。溝の方向は西で約10度北に振れており、東南東方向に延び、1号河川跡に流れ込む。埋土から須恵器片、赤褐色土器片が出土している。

4号溝跡出土遺物（第52図-1 図版37-鉄製品1）

鉄製品（1）：埋土出土で、大型の刀子である。

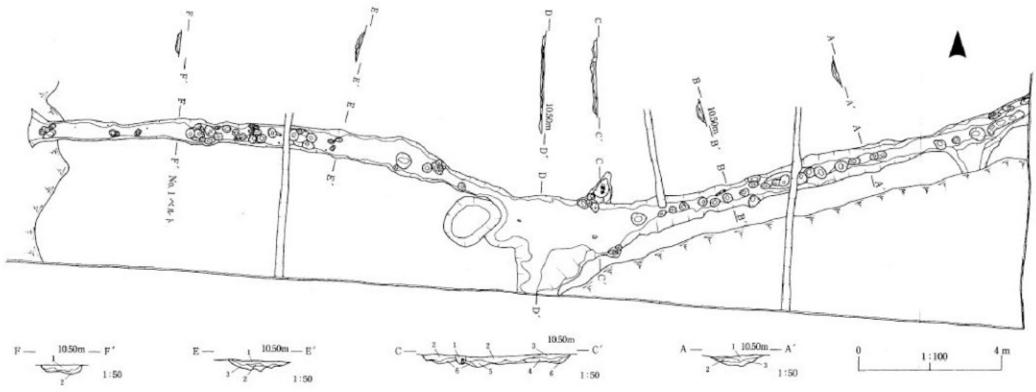
5号溝跡（第38図 図版18）

B区西側の第VI層地山面より検出された溝跡である。幅約120cm、深さ13cmの西で約30度南に振れる東側の溝と不整形の西側の溝からなる。北から南へと延び、東側の溝が西側の溝によって切られると幅1～2.9mのやや広い溝となる。周辺からは細い杭状の木材が出土している。

5号溝跡出土遺物（第44図-74～75 図版29-74～75）

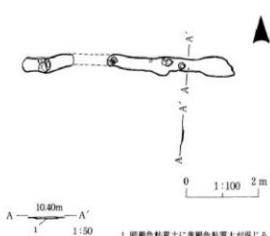
74は埋土、75は底面出土である。

陶磁器（74～75）：74は肥前系磁器の染付丸皿である。内面に2重格子文を染め付け、蛇ノ目釉剥ぎを施す。75は肥前系（唐津系）陶器灰釉丸皿である。釉の色調はオリーブ灰色を呈し、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台部分は無釉である。



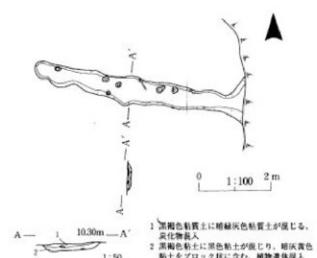
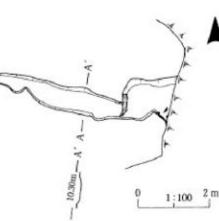
No.1 ベルト土層断面

第34図 1号溝跡

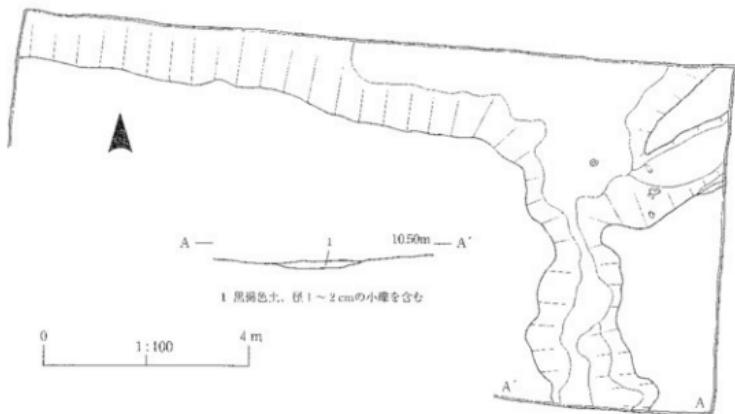


第35図 2号溝跡

第36図 3号溝跡



第37図 4号溝跡



第38図 5号溝跡

1号土坑（第39図 図版20）

B区中央部の第VI層地山面より検出された土坑である。長軸約75cm、短軸約70cmの不整形で、深さ8~15cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、中央部にくぼみを有する。

1号土坑出土遺物（第44図-76 図版29-76）

須恵器（76）：埋土出土で、蓋の天井部破片である。天井部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施す。内面を転用鏡として使用している。この他に埋土から土師器片、赤褐色土器片が出土している。

2号土坑（第40図 図版20）

B区中央部の第VI層地山面より検出された土坑である。長軸約210cm、短軸約135cmの楕円形で、深さは南側で9cm、北側で4cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、底部は複雑に掘り込まれている。

2号土坑出土遺物（第44図-77~78 図版29-77~78）

いずれも埋土出土である。この他に埋土から須恵器片が出土している。

土師器（77）：底部回転糸切り無調整の台付塊である。台周縁のみ撫で調整を施す。内面は黒色処理を施す。ミガキは磨滅により不明瞭である。

赤褐色土器（78）：底部回転糸切り無調整の壺である。底部切り離しはやや難である。

3号土坑（第41図 図版21）

B区中央部の第VI層地山面より検出された土坑である。長軸約90cm、短軸約75cmの円形で、深さ7cm



第39図 1号土坑

である。壁はゆるやかに立ち上がり、底部は複雑に掘り込まれている。埋土から赤褐色土器片が出土している。

4号土坑（第42図 図版21）

B区中央部の第VI層地山面より検出された土坑である。長軸約135cm、短軸約115cmの不整形で、深さ5cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、底部は複雑に掘り込まれている。埋土から須恵器片、赤褐色土器片が出土している。

5号土坑（第43図 図版21）

B区中央部の第VI層地山面より検出された土坑である。長軸約70cm、短軸約65cmの円形で、深さは西側で4cmを測り、東側では徐々に浅くなっている。壁は西側で急に立ち上がる。

5号土坑出土遺物（第44図-79 図版29-79）

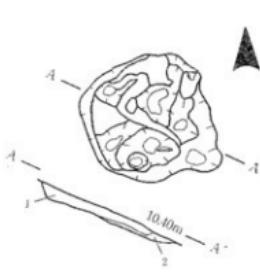
土師器（79）：埋土出土で、非口クロ成形の甕である。底面にはムシロ痕がみられる。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整を施す。



1 喧縫灰色粘質土に青灰色粘土が混じる
2 青灰色粘土に喧縫灰色粘質土が混じる



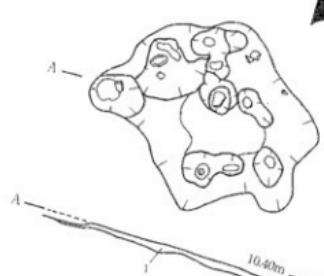
第40図 2号土坑



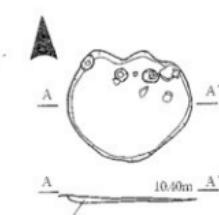
1 喧縫灰色粘質土に褐灰色粘質土が混じる
2 褐灰色粘土に喧縫灰色粘質土が混じる



第41図 3号土坑



1 喧縫灰色粘質土に古灰色粘土が混じる



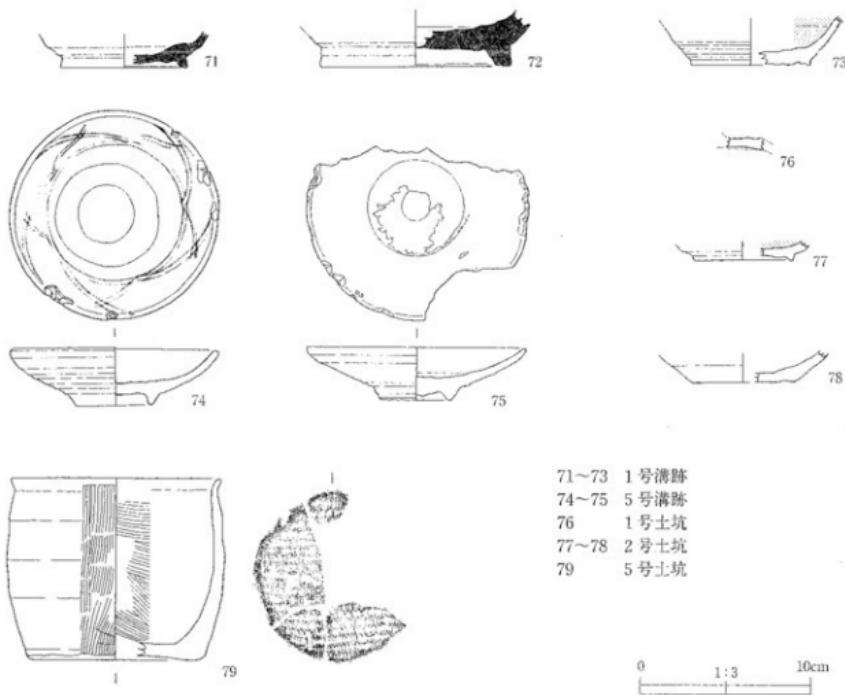
1 黒褐色粘土に青灰色粘質土が混じる



第42図 4号土坑



第43図 5号土坑



第44図 B区遺構内出土遺物（土器・陶磁器）

B区遺構外出土遺物

B区 第Ⅱ層（造成土）出土遺物

（第45図-80~88、第53図-2、第54図-9 図版29~30-80~88、図版37-石器2、錢貨9）

須恵器（80）：脚部に縱方向の沈線3本がみられる円面鏡である。焼成はやや甘い。

土師器（81~82）：81は内面黒色処理を施した台付塊である。底面は菊花状調整痕を残し、台周縁は撫で調整を施す。内面は底部付近横方向、体部下半は縱方向のミガキ調整を施す。82は非口クロ成形の甕の口縁部破片である。口縁部から頸部にかけて7本の横走沈線を施す。内面には煤状炭化物が付着している。

赤褐色上器（83~84）：83は底部回転糸切り無調整の坏である。84は底部回転糸切り無調整の皿である。

陶磁器（85~88）：85は西洋コバルトを用いる型紙摺りの磁器染付碗である。86は肥前系磁器の丸碗である。外面に2重網目文を染め付ける。87は白磁の仏飯器である。脚部の一部が露胎となっている。88は肥前系（唐津系）陶器の灰釉皿である。釉の色調はオリーブ灰色を呈し、高台部分は無釉である。砂目積み痕がある。

石器（2）：珪質頁岩製の石匙である。つまみ部は欠損している。縦長の剥片を素材とし、周辺に二次加工を施す。縁部には微小剥離痕がみられる。

銭貨（9）：寛永通寶である。古寛永（初鑄1636年～1659年にかけて鋳造）である。

B区第Ⅲ層出土遺物（第45～46図-89～105、第50図-3～7 図版30～31-89～105、図版35-3～7）

須恵器（89～91）：89は底部回転ヘラ切り後、軽い撫で調整を施した壺である。90～91はいずれも底部回転糸切り無調整の壺である。

土師器（100～102）：100～102は非ロクロ成形の壺である。100は外面に口縁部から体部下端にかけて縱方向の刷毛目調整を施す。内面は体部上半から底部にかけて横方向の刷毛目調整を施す。底面は砂底風を呈し、ていねいな撫で調整を施す。101は外面に体部下半から下端にかけて縦方向にやや幅広のミガキ調整を施す。また下端の一部をヘラ状工具で押しつけた痕跡がある。内面は体部下半から底部にかけて横方向の刷毛目調整を施す。底面は砂底風で、軽い撫で調整を施す。102は外面に体部下半から下端にかけて縦方向の刷毛目調整を施す。内面は体部下半から底部にかけて横方向の刷毛目調整を施す。底面はムシロ痕を残す。

赤褐色土器（92～99、103～104）：92～96は底部回転糸切り無調整の壺である。いずれも底部切り離しは難である。92は外面の口縁部から体部上半にかけて煤状炭化物が付着し、二次加熱痕がみられる。97～99は底部回転糸切り無調整の皿である。98には外面体部下半に二次加熱痕がみられる。103は泡弾形長胴壺の底部である。外面に平行な叩き目痕、内面に平行の当て具痕がみられる。104は鍋の口縁部破片である。

土製品（105）：用途不明の玉状土製品である。焼成前に約4mmの1条の穴を貫通させている。

木製品（3～7）：3は棒状製品である。両端を丸く作り出している。4は齧印である。上端部に背割れが確認できる。5～7は下端部を尖らせた串状製品である。5～6は上端部に面取りを施す。7は上端部欠損している。5～7は、齧印として使用された可能性がある。

B区第Ⅳ層出土遺物

（第46～47図-106～117、第50図-8～10、第53図-3 図版31-106～117、図版35-8～10、図版37-石器3）

土師器（106～110）：106は壺である。外面は口縁部に横方向のミガキ調整を施す。内面は、縦方向のミガキ調整をし、黒色処理を施す。底部の切り離しは摩滅により不明である。107～110は非ロクロ成形の壺である。107は外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。底面には木葉痕を残す。外面に煤状炭化物が付着している。108～110は底面にムシロ痕を残す。108は外面は縦方向、内面は横方向もしくは斜方向の刷毛目調整を施す。109は外面は縦方向の刷毛目調整を施した後、口頸部のみ横方向のミガキ調整を加える。内面は斜方向の刷毛目調整を施した後、口頸部のみ最後にていねいな横方向の刷毛目調整を施す。110は外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。

赤褐色土器（111～117）：111～116は底部回転糸切り無調整の壺である。112の底面には糸切り後にスノコ状の圧痕がみられ、底部切り離しは難である。111と112には内外面に、116には外面に口縁部から体部上半にかけて二次加熱痕がみられる。117は壺である。内外面ともにロクロ利用のカキ目調整がみられる。

木製品（8～10）：8は不明木製品である。下端に面取り加工がみられる。上端部は欠損している。

9は容器蓋である。中央に穿孔があり、短い木片が詰まっている。10は小型の曲物の底板である。

石器（3）：珪質頁岩製の石槍である。基部、先端部はわずかに欠損している。ていねいな両面加工を施しており、素材の形状は不明である。

B区第V層出土遺物

（第47～49図－118～154、第50～51図－11～33 図版32～34－118～154、図版35～36－11～33）

須恵器（118～121）：118～120は底部回転糸切り無調整の壺である。118は内外面に柿渋状の液を塗布し、外面の口縁部から体部上半にかけて煤状付着物がみられ、内面は底面から体部上半にかけて墨が付着している。また、底部内面は転用硯として使用されており、底面に墨の付着、体部外間に2条の線状の墨痕がみられる。119は内外面ともに柿渋状の液を塗布し、外面の口縁部から体部上半にかけて煤状付着物がみられる。121は長頸瓶の体部から底部である。底部回転ヘラ切り後、台周辺および底部全面に撫で調整を施す。胎土は緻密で、焼成も良好である。火拂がみられる。

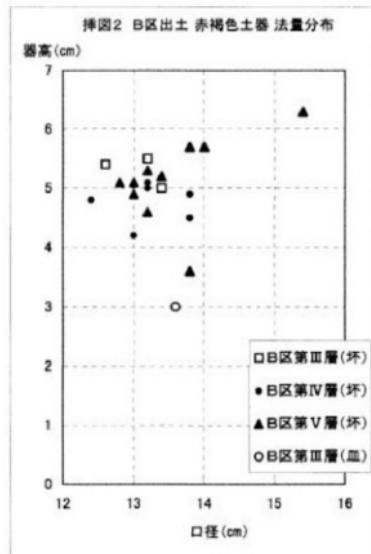
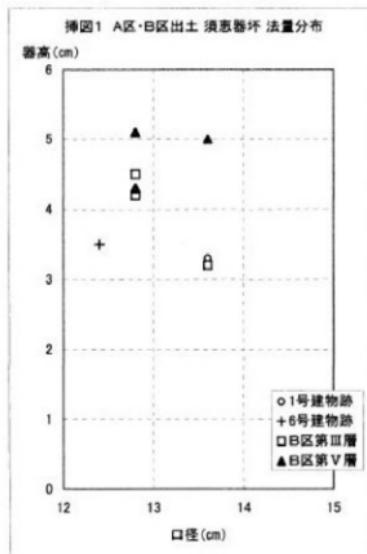
土師器（122～137）：122は底部回転糸切りの壺である。底部にわずかに高台を作り出しており、台周縁部に撫で調整を施す。外面は口縁部から体部上半横方向のミガキ調整を施し、内面は横方向のミガキ調整をし黒色処理を施す。123は非ロクロ成形の壺である。底部と体部下端の稜が不明瞭で丸底風になっている。内面はミガキ調整をし、黒色処理を施す。また内面には漆が付着している。124～136は非ロクロ成形の壺である。124は外面は刷毛目調整後、幅広のミガキ調整を施し、内面は横方向の刷毛目調整を施す。底面は砂底風で撫で調整を施す。125は内外面ともに口縁部から頸部にかけて横方向の刷毛目調整を施した後に横方向の撫で調整を施す。外面にはその後、頸部から体部上半にかけて縱方向の刷毛目調整を施す。126は外面頸部に一段の段を有し、内外面ともにミガキ調整を施す。127は外面は縱方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。口縁端部を小さくつまみ出している。128は外面は縱方向のミガキ調整、内面は横方向の刷毛目調整を施す。底面には二枚分の木葉痕を残し、周辺には砂粒付着がみられる。木葉痕の部分には砂粒の付着がみられないことから、木葉が付着した状態で砂粒が付着し、最後に木葉をはずしたと考えられる。129は外面は縱方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。底面は撫で調整を施す。130～132は底面は砂底風で撫で調整を施す。130は内外面ともに縱方向の刷毛目調整を施す。131は外面は縱方向の刷毛目調整の後、縱方向のミガキ調整を施し、内面は不明瞭だが、斜め方向の刷毛目調整がみられる。132は外面は縱方向のやや幅広のミガキを施し、内面は横方向の撫で調整を施す。133～136は底面にムシロ痕を残す。133は外面は縱方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。134は外面は縱方向の刷毛目調整の後、縱方向の幅広のミガキ調整を施す。内面は縱方向の刷毛目調整を施しているが、磨滅により不明瞭である。135は外面は縱方向の幅広のミガキ調整を施す。内面は刷毛目調整を施しているが、磨滅により不明瞭である。136は外面は縱方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。137は非ロクロ成形の鍋である。外面は縱方向、斜方向の刷毛目調整を施す。

土製品（138～139）：138～139は非ロクロ成形の土製支脚である。いずれも、粘土紐巻き上げ痕を残し、加熱により脆くなっている。138の内面は上面付近にのみ刷毛目調整がみられる。

赤褐色土器（140～154）：140～142は墨書きのある壺である。140は底部回転糸切り無調整であり、体部に「有」の墨書きがみられる。141は底部回転糸切り無調整である。体部に「成」の墨書きがみられる。内外面ともに口縁部から体部上半にかけて煤状炭化物と二次加熱痕がみられ、灯明皿に使用したものと考えられる。142は壺の口縁部破片であり、体部に判読不明の墨書きがみられる。143～150は底部回転糸切り無

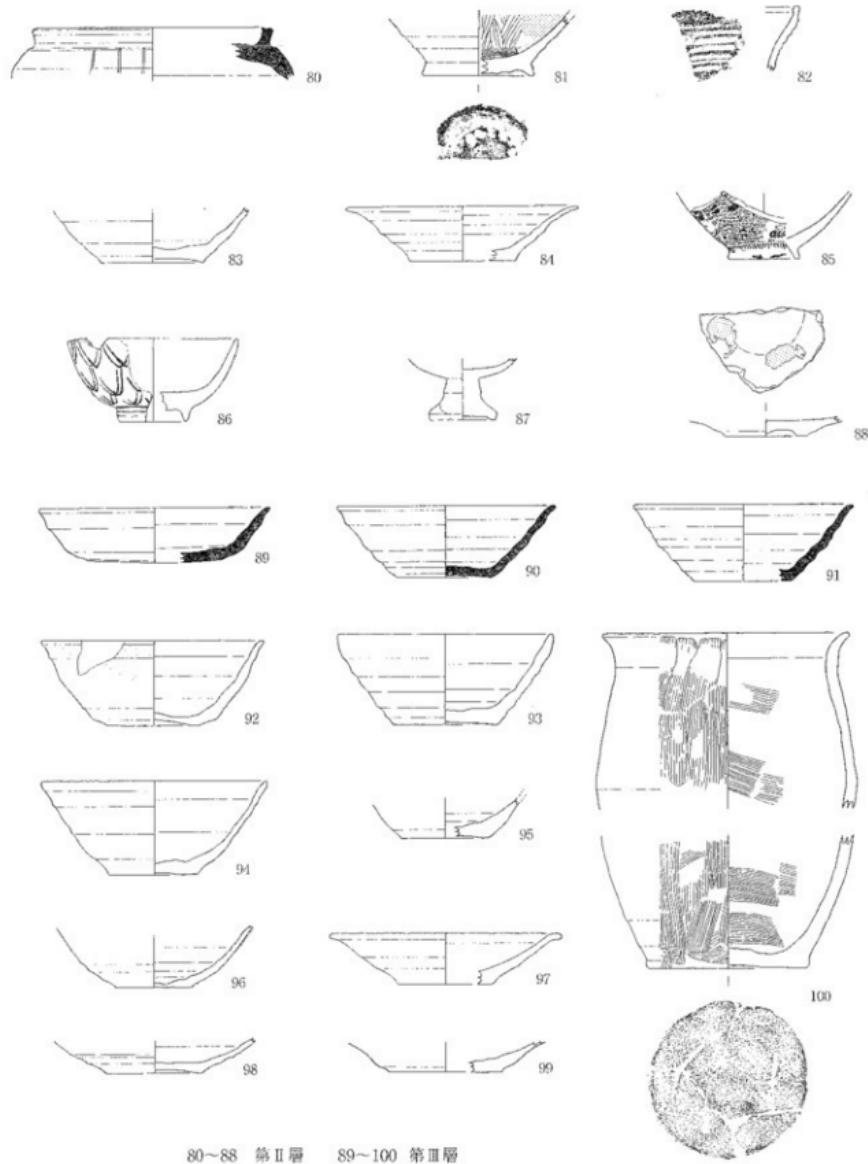
調整の坏である。143は外面口縁部と内面全面に、144は外面口縁部と内面全面から底部にかけて部分的に煤状付着物がみられる。145は内面柿渋状の液を塗布し、内外面ともに口縁部から体部上半にかけて煤状炭化物がみられる。150は内外面ともに口縁部から体部下半にかけて二次加熱痕がみられる。151～152は長胴甕の上半部である。砲弾形となる可能性が高い。151は内外面ともにロクロ利用のカキ目調整を施す。152は外面の体部上半にロクロ利用のカキ目調整を施し、外面の体部上半と内面に輻方向の削毛目調整を施す。153は砲弾形の甕の底部である。外面は平行叩き目であり、内面は平行当て具痕がみられる。154は鍋の口縁部破片である。

本製品(11～33)：11は曲物の底板である。12～14は連座下駄である。いずれも3カ所の鼻緒窓があり、板目板を素材としている。12は小型品であり、素材となる板目板の心材方向に歯を作り出す。13は中型品であり、素材となる板目板の木目方向に沿って歯を作り出す。14は大型品であり、素材となる板目板の邊材方向に歯を作り出す。15は蓋串である。頭部を山形に作り出し、背割れをいれている。16～17は断面四角形の串状製品である。16は先端部を尖らせている。いずれも蓋串として使用した可能性がある。18～29は箸である。30～31は棒状製品である。30は下端部を尖らせ、上端部は面取り加工を施す。31は断面楕円形で下端部が欠損している。32は部材である。両端を加工し、凸部を作り出している。33は側面に斜めの抉りをいれており、焼め具の可能性がある。焼けており、下端部が欠損している。



挿図3 赤褐色土器坏 底径指数(=口径／底径)

長岡B区第II層	0.394～0.476(M=0.427)	秋田城SG1031 7層	0.350～0.528(M=0.422)	9世紀第4四半期
長岡B区第IV層	0.362～0.500(M=0.435)	秋田城SG1031 10層	0.390～0.536(M=0.464)	9世紀第3四半期
長岡B区第V層	0.383～0.515(M=0.446)	秋田城SG1031 11層	0.393～0.573(M=0.497)	9世紀第2四半期

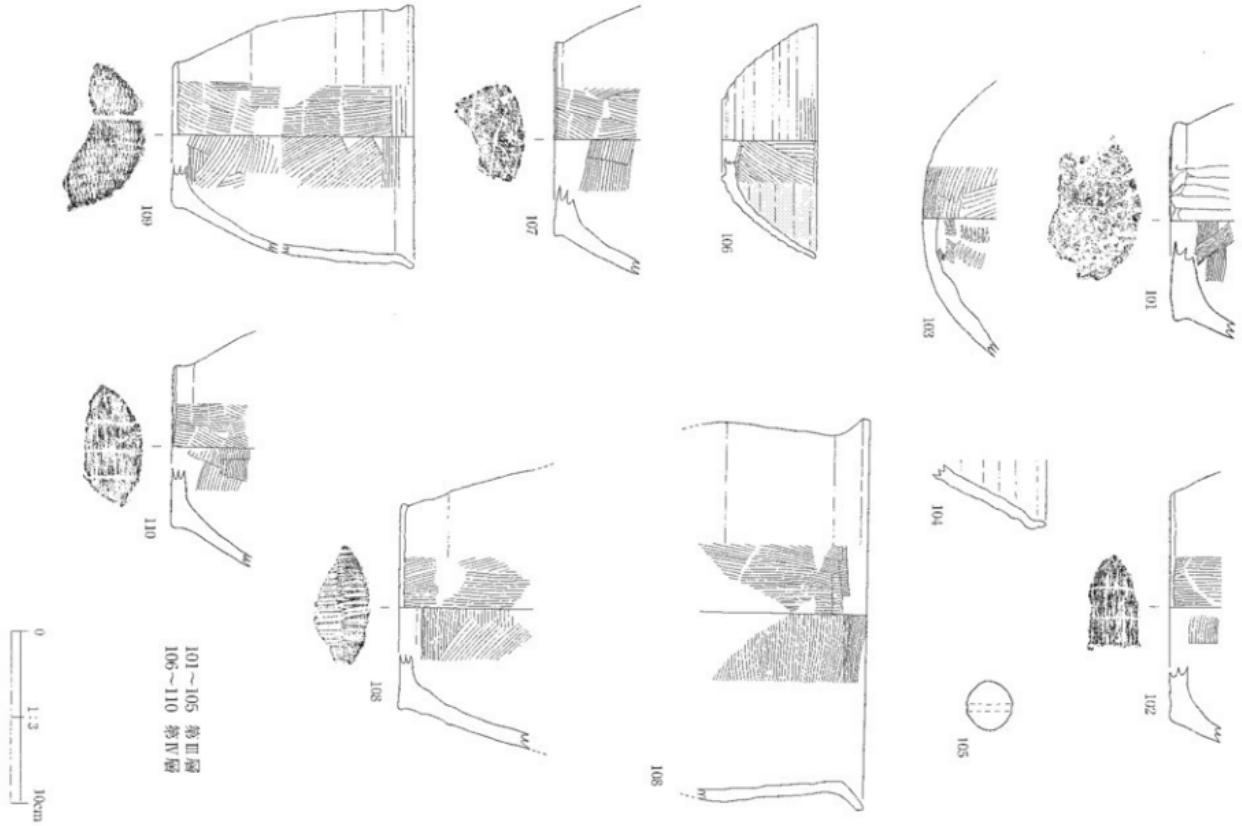


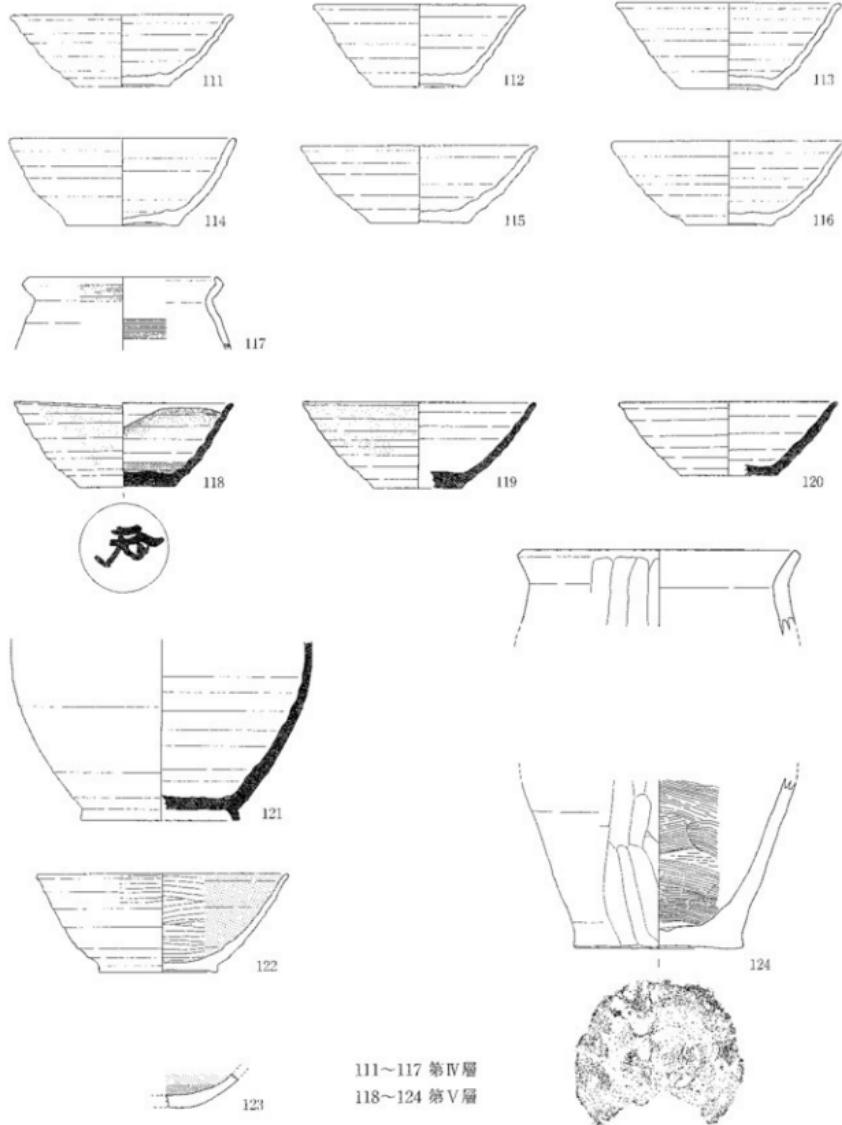
80~88 第Ⅱ層 89~100 第Ⅲ層

0 1:3 10cm

第45図 B区遺構外出土遺物（土器・陶磁器）①

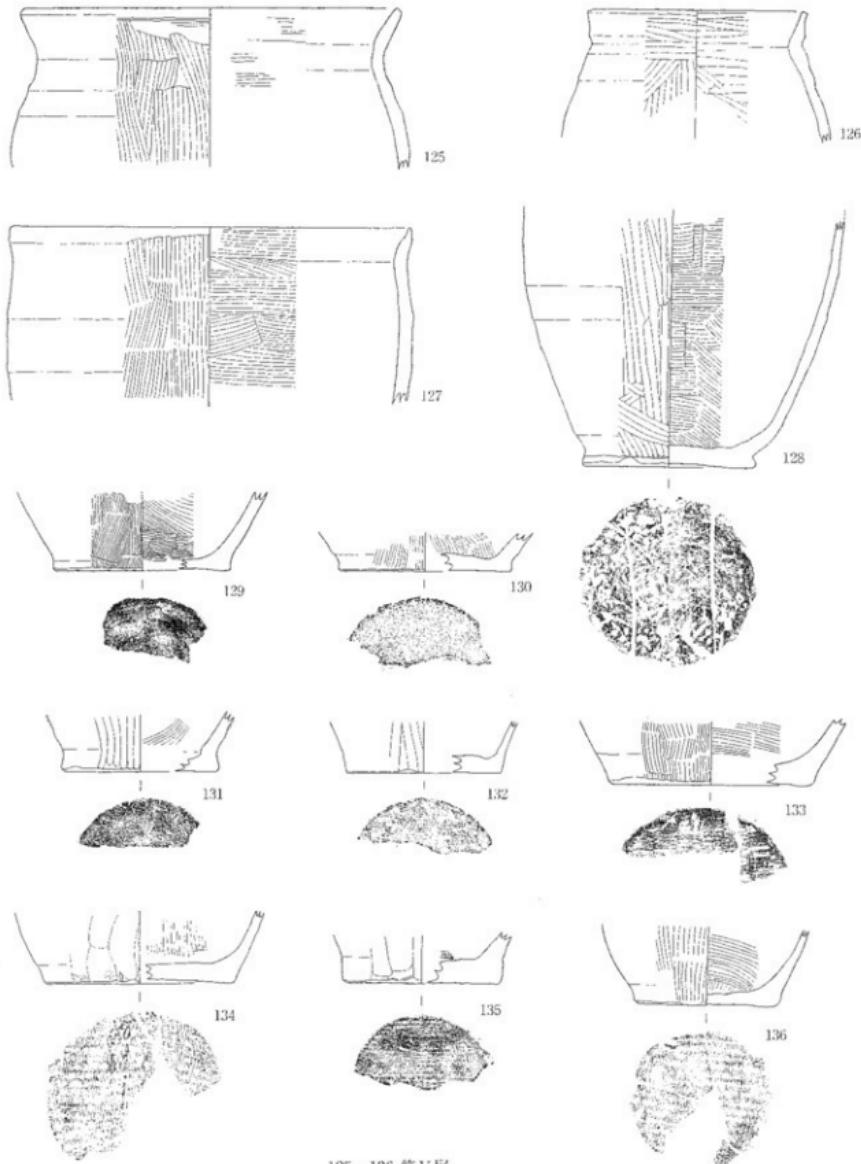
第46図 B区遺構外出土遺物（土器・陶磁器）②





0 1:3 10cm

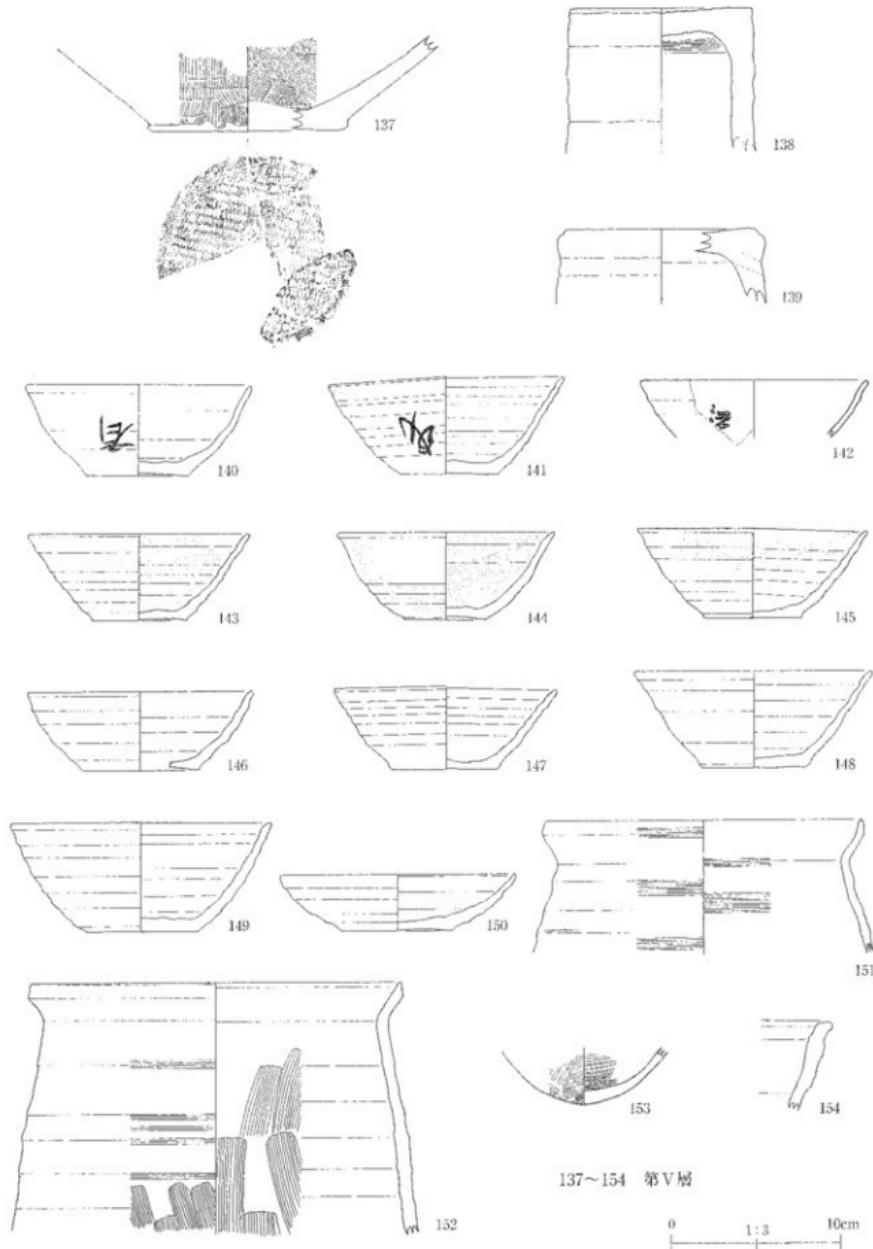
第47図 B区遺構外出土遺物（土器・陶磁器）③



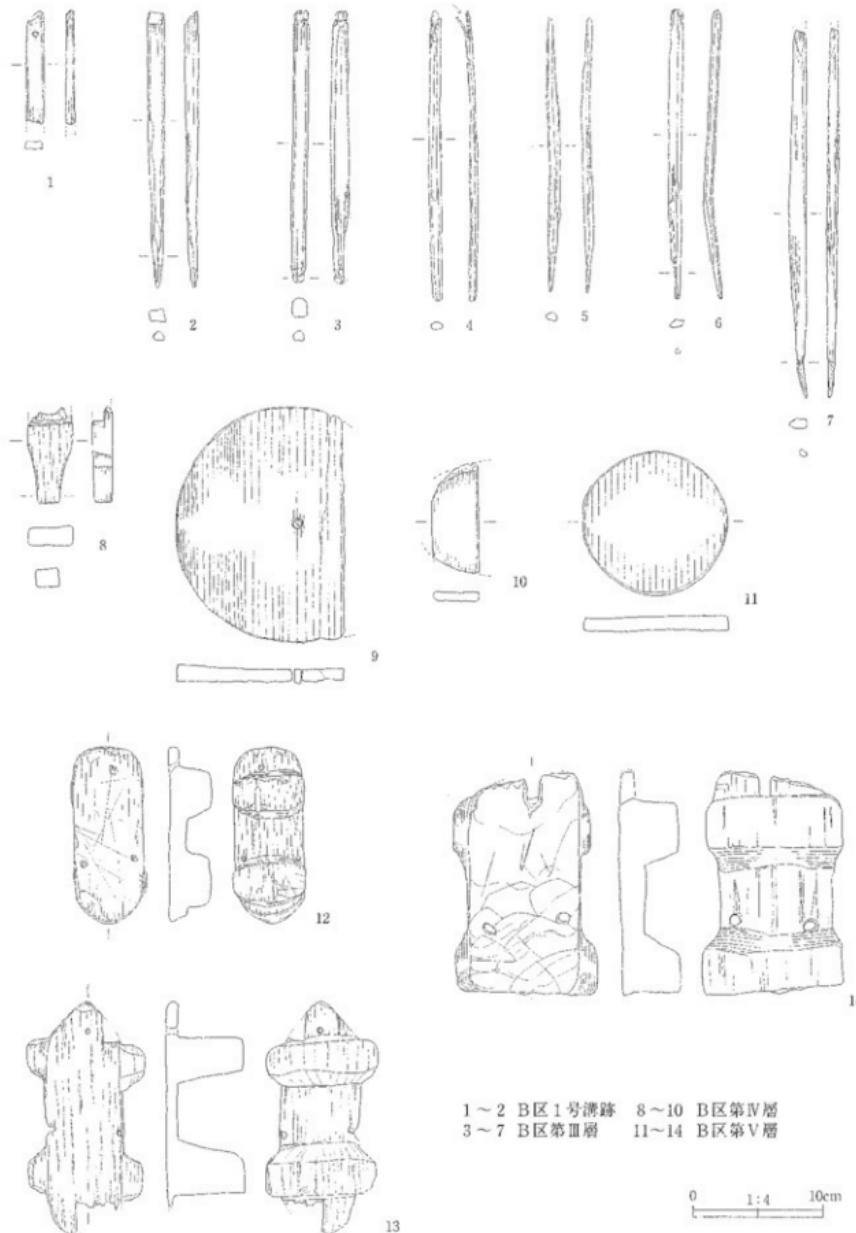
125~136 第V層

0 1:3 10cm

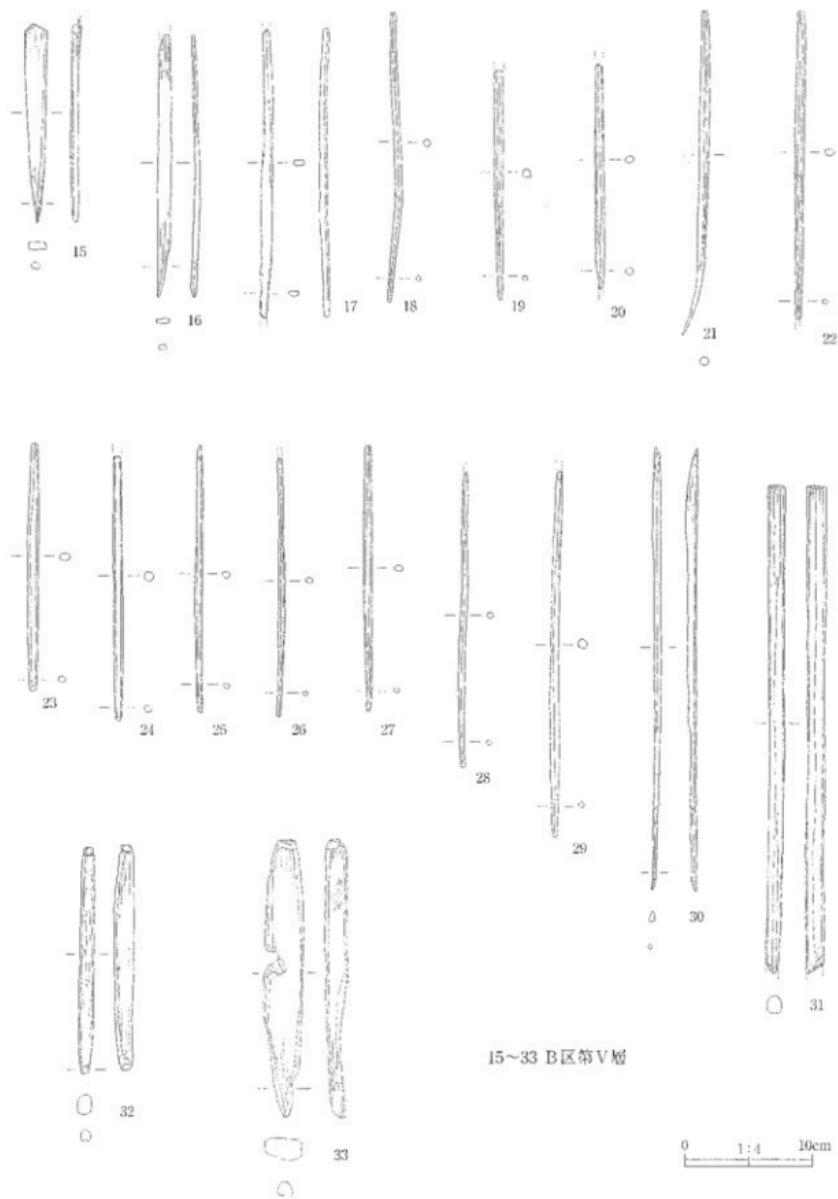
第48図 B区遺構外出土遺物（土器・陶磁器）④



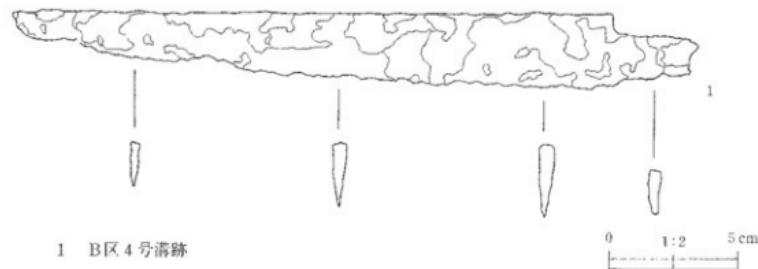
第49図 B区遺構外出土遺物（土器・陶磁器）⑤



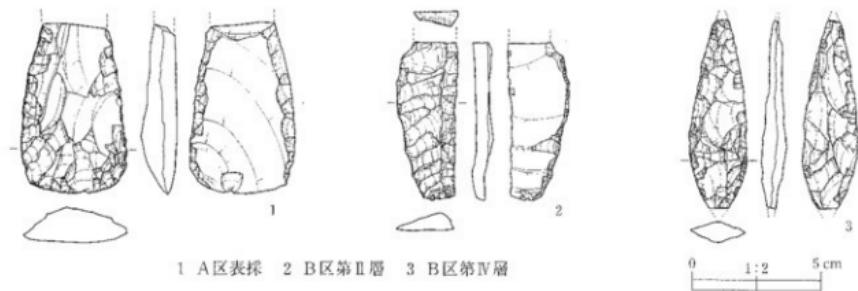
第50図 出土遺物（木製品）①



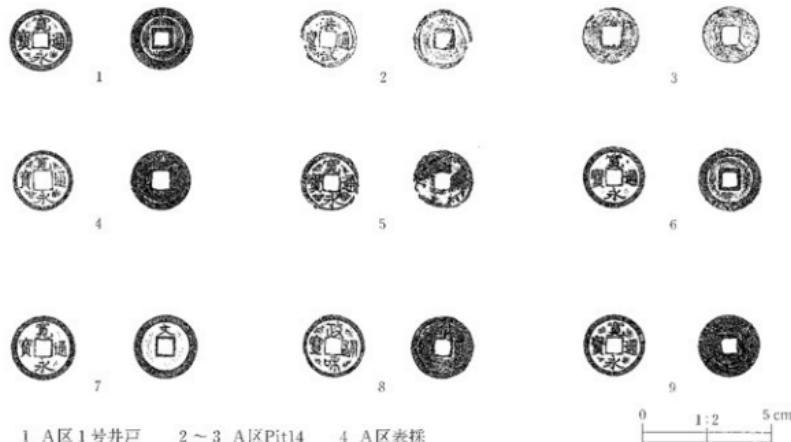
第51図 出土遺物（木製品）②



第52図 出土遺物（鉄製品）



第53図 A区・B区出土遺物（石器）



第54図 A区・B区出土遺物（錢貨）

第三章 まとめ

1. 検出遺構等の概要について

長岡遺跡では、調査区を北側の圍場整備による削平部分であるA区、南側の水路掘削部分であるB区に分けて調査を実施した。調査は調査対象地における遺構・遺物の内容や遺構の変遷を把握し、周辺の利用状況や遺跡の性格を明らかにすることを目的として実施した。

調査の結果、全体で掘立柱建物跡8棟、柱列跡1列、溝跡8条、井戸跡1基、土坑12基等の他、小ピット群や古代の小河川跡が検出されている（第7図遺構全体図参照）。また、遺物としては、各遺構やB区小河川跡から古代の須恵器、土師器、赤褐色土器、施釉陶器、瓦、円面鏡等が出土し、その他に遺構や造成土から近世陶磁器や銭貨が出土している。調査区別に見た場合、北側A区では、建物方位に規則性を持ち数棟単位で変遷する掘立柱建物群（8棟）を中心として、方位等から建物群と関連すると思われる溝跡（3条）や柱列跡（1列）等が東側にまとまって検出されている。その他に、建物跡周辺では小ピット群や土坑（7基）も検出されている。南側B区においては、古代の小河川跡（1号河川跡）を中心とし、その西岸付近で溝跡（3条）、土坑（5基）、東側で溝跡（1条）が検出されている。また、B区西側では近世の溝（1条）も検出されている。

それら検出遺構については、重複関係や方位、出土遺物の検討等を行うことにより、時期及び変遷の把握が可能である。以下調査区ごと及び各遺構ごとにその内容について記述する。

2. 各遺構の年代について

（A区） A区の主要遺構である東側の掘立柱建物群は、建物方位に一定の規則性が認められ、それにより大きくA類とB類の2タイプに大別される。

A類は建物の東西方向が西で北に約32度から34度振れるタイプで、1号建物跡～6号建物跡が該当する。B類は建物の東西方向が西で北に約45度から46度振れるタイプで、7号建物跡と8号建物跡が該当する。A・B類内及びA・B類間の出土物跡の切り合い、重複関係については、A類内では1号建物跡・4号建物跡・5号建物跡が同位置及び隣接して重複し、4号建物跡→1号建物跡→5号建物跡の順に変遷する。同じくA類内の2号建物跡・3号建物跡が同位置で重複し、2号建物跡→3号建物跡へと変遷する。そのことからA類内も新旧2小期以上に区分されると考えられる。A類とB類間については、4号建物跡・5号建物跡と7号建物跡が位置的に重複するものの、直接的な切り合い関係はない。

各建物跡からの出土遺物については、A類に属する1号建物跡と6号建物跡の柱掘り方より9世紀第1四半期頃に位置付けられる口径12cm台半ば～13cm前半台の底部ヘラ切り後軽い撫で調整を施す須恵器坏が出土している（註1）。また、A類内の重複関係でも古い2号建物跡柱掘り方より、8世紀代に位置付けられる非クロコ成形で頭部から口縁部にかけて多重沈線を有する甕と、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期に位置付けられる底部回転ヘラ切りで軽い撫で調整の須恵器坏が出土している。一方、B類に属する8号建物跡柱掘り方からは、底部回転糸切り無調整の塊形で、底部の形態から9世紀第2四半期以降に位置付けられる赤褐色土器坏Aが出土している（註2）。

以上のことから、建物群については、A類掘立柱建物跡→B類掘立柱建物跡の変遷が考えられ、A類は8世紀末頃から9世紀第1～2四半期頃、B類は9世紀第2四半期以降の年代が考えられる。B類の下限年代については、建物の存続期間を考慮した場合、9世紀第3四半期頃と推察される。

A区の溝跡や柱列に関しては、建物群と同様に方位に一定の規則性が認められるものがある。6号・7号溝跡は東西方向が西で約32度から36度振れており、掘立柱建物A類の方位とほぼ一致する。8号溝

については東西方向に置き換えた場合、北で約18度、1号柱列跡については24度とバラつきがある。7号溝跡内からは、8世紀末～9世紀第1四半期頃に位置付けられる底部から体部下端にケズリ調整を施す小型の土師器塊から、9世紀第3四半期以降に位置付けられる土師器台付皿、赤褐色土器皿や坏Aまで年代に幅を持つ遺物が出土している。6号溝跡内からも9世紀第3四半期以降に位置付けられる土師器台付塊や赤褐色土器坏Aが出土している。以上のことから、6号・7号溝跡については方位と出土遺物から、A類建物と同時期に掘り込まれ、B類建物と併行する時期まで機能したと考えられる。8号溝跡からは丸底風の土師器坏が出土しており、A類建物以前の8世紀代に遡る可能性も持つが明確ではない。

土坑については、6号土坑から8世紀末～9世紀第1四半期に位置付けられる赤褐色土器坏Bや、須恵器坏が出土している。10号土坑からも9世紀第1四半期に位置付けられる須恵器坏が出土している。また、7号土坑からは、9世紀後半に位置付けられる土師器台付皿や灰釉陶器皿（黒籠90号窯式）が出土している。それら土坑の年代も周辺の主要遺構の年代及び変遷と併行するものとなっており、周辺の利用や活動に伴う遺構といえる。

なお、唯一の井戸跡である1号井戸跡については、古代の遺構とする明確な年代比定資料がなく、埋土上層から寛永通寶が出土しており近世の遺構となる可能性もある。また、東側中央付近の小ビットからは無文銭と洪武通寶が出土しており、中世末から近世の遺構となる可能性がある。

A区については、前述した8世紀代に位置付けられる多重沈線タイプの壺の他、遺構外出土ではあるが、8世紀前半代に位置付けられる底部ヘラケズリ調整の須恵器坏が出土しており、周辺に8世紀代に遡る生活域が存在した可能性が高い。

(B区) 古代の遺構としては、中央の1号河川跡の東西両側に溝跡、土坑等が検出されているが、建物跡は検出されていない。1号河川跡西岸にまとまって検出される土坑群については、埋土より須恵器と土師器の他、赤褐色土器が出土しており、8世紀末以降の年代が考えられる。2号土坑からは9世紀第2四半期以降に位置付けられる赤褐色土器坏Aが出土していることから、その他の土坑群も9世紀第2四半期以降の9世紀代に位置付けられる可能性が高い。

1号河川跡東側の1号溝跡からは、赤褐色土器片や9世紀第1四半期頃の須恵器台付坏等が出土しており、9世紀代の遺構と考えられ、埋土上層検出の十和田a火山灰の堆積から10世紀前葉にはすでに機能を停止していたと考えられる（第IV章長岡遺跡のテフラ分析参照）。河川跡東側の2号溝跡～4号溝跡については、出土遺物や後述の検出層位の年代から、2号溝跡については大きく9世紀代、4号溝については9世紀第2四半期頃、3号溝については9世紀第3四半期頃の年代が考えられる。

B区においては、1号河川跡西岸付近に特に集中して遺物の廃棄や整地等が行われている。その周辺における遺物包含層の堆積年代や利用状況を、出土遺物より検討した場合以下になる。

最下層の第V層については、古いものでは9世紀第1四半期頃に位置付けられる赤褐色土器長胴甌等が出土しているが、主体は9世紀第2～3四半期に位置付けられるやや底径比の大きいタイプ及び器高の低いタイプの赤褐色土器坏Aや底部回転糸切り無調整の須恵器坏であり、堆積年代にやや幅を持つ。第IV層については、9世紀第3四半期に位置付けられる土師器台付塊や、法量のやや縮小した赤褐色土器坏Aが出土している。第III層については、赤褐色土器皿や更に底径比の縮小した赤褐色土器坏A、法量の縮小した底部回転糸切り無調整の須恵器坏等、より新しい年代的要素を持つものが出土しており、堆積年代は9世紀第3四半期から第4四半期頃まで幅を持つと考えられる。また、1号河川跡西岸付近の第V層から第III層にかけて、墨書き土器や煤状付着物が付き灯明皿として利用された坏類、木製品として舟車類が出土しており、西岸付近の水辺は祭祀の場としても利用されていたと考えられる。各堆積層

のうち特に第V層の段階からの出土が多く、9世紀第2四半期から第3四半期頃がそれら祭祀行為のピークと考えられる。

以上のことから、1号小河川跡付近については9世紀前半より周辺が利用されはじめ、特に西岸付近の水辺が9世紀第2四半期頃から9世紀後半にかけて遺物の破棄場所や祭祀の場として利用されたと考えられる。またB区の他の遺構も9世紀代に位置付けられると考えられる。

なお、B区西側の5号溝跡については、底面より17世紀後半～18世紀代の肥前Ⅲ期からVI期に該当する蛇ノ目釉剥ぎの唐津系灰釉陶器皿、壇上より肥前VI期に該当する蛇ノ目釉剥ぎの磁器染付皿が出土しており、近世の遺構と考えられる。

3. 特徴的出土遺物について

(1) 瓦等について

今回の調査ではA区から未報告分の破片資料も合わせ50点以上の瓦が出土している。それらの瓦は①凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕を残す一枚作りの平瓦、②凸面に縄目の叩き締め後撫で調整を施し、凹面には布目圧痕を残す丸瓦、③凸面に格子目の叩き痕、凹面に布目圧痕を残す一枚作りの平瓦に大別される。①～③の各タイプとも古代城柵官衛遺跡の秋田城跡から出土しており、①と②のタイプについては大きく創建期以降の8世紀第2四半期～9世紀前半、③のタイプについては8世紀末～9世紀前半の年代が考えられる（註3）。

現在まで秋田平野及びその周辺において、秋田城跡及び生産地である窯跡以外に古代の瓦が出土した遺跡は極めて限られており、秋田城跡に隣接する後城遺跡と秋田城跡から北北東に約13km離れた昭和町の羽白目遺跡がある。羽白目遺跡については「秋田城外界烽遺跡」と考察され、後城遺跡も秋田城と関連の強い集落と考えられている。いずれにしても秋田城及び律令体制との関係が強いと考えられる施設や集落から瓦が出土しており、長岡遺跡についても秋田城及び律令体制との密接な関係が指摘される。長岡遺跡は秋田城跡と羽白目遺跡の中間にあたり、各遺跡に共通して格子目瓦が出土している。また東に約3kmの近接地には、秋田城に須恵器や瓦を供給した新城窯跡群が存在している。長岡遺跡から瓦が出土する背景には、8世紀末以降の秋田郡域の北への拡大と実質的な律令支配体制の浸透、瓦生産地である新城窯跡群との関係などが想定される。

また、出土遺物においては墨書き土器の他にA区を中心として円面鏡が4点、転用鏡が3点出土しており、識字層の存在と活動が推定され、その点でも律令体制との密接な関係が指摘されるといえる。

(2) 非ロクロ成形の土師器壺・鍋について

B区では1号河川跡西岸付近を中心として、多数の沸煮具が出土している。9世紀第2四半期を中心として前後の時期に堆積した第V層からは、ロクロ成形の赤褐色土器の砲弾型長胴壺や鍋、非ロクロ成形の土師器壺や鍋が共併して出土しており、当時の沸煮具の様相を知る上で重要な資料と考えられる。特に非ロクロ成形の土師器沸煮具については、①底部に木葉痕を残すタイプの壺、②底部に砂が付着し撫でを施す砂底風のタイプの壺、③底部にムシロ痕を残すタイプの壺や鍋に分類される。それらの壺・鍋の体部外面の調整について、①はミガキ調整主体である。②はミガキ調整を主体として刷毛目調整もある。③は刷毛目調整を主体として幅広のミガキ調整もある（註4）。各タイプのうち①は8世紀以前から普遍的に、②は8世紀代には少数だが認められる在地系の壺である。A区出土の多量沈底タイプの壺もほとんどが①に該当する。③については9世紀以降に新たに出現してきたタイプの壺・鍋といえる。そして、③タイプにのみ鍋があり、壺には器形的に赤褐色土器の影響を受けているものが認められる。

これらの沸煮具の様相は、秋田地方における8世紀末以降、9世紀代のロクロ土師器（沸煮具）生産

技術の受容と拡大、その影響による在地系非ロクロ土師器（沸煮具）の変化、形態と製作技法の変化や新たなタイプの出現等を示唆するものとして重要といえる（註5）。

4. 利用状況の変遷と遺跡の性格について

A区については、8世紀末頃から9世紀第3四半期にかけて一定の方位・規則性のもと、2~3棟単位で掘立柱建物が存在し変遷する。建物周辺も含めたA区全体の利用も9世紀後半までと考えられる。A地区及び建物群は、一般集落における居住域ではなく、周辺も含めた長岡遺跡における中心的な施設の一部と考えられる。B区については遺跡の中心域から離れているが、1号河川跡西岸を中心として、9世紀前半から遺物の廃棄場所等として利用されはじめ、特に9世紀第2四半期頃から9世紀後半にかけては水辺の祭祀の場としても利用されている。

古代における遺跡全体の性格については、遺構や前述した出土遺物の内容等より、8世紀末以降の9世紀代においては在地の一般的集落ではなく、律令体制及び秋田城と密接な関係を持つ遺跡として位置づけられるといえる。しかし、それが秋田郡内の小規模な官衙的施設となるのか、律令体制と密接に結びついた官衙出先施設のようなものを伴う集落であるのかについては、奈良時代に遡る可能性があるA区周辺をはじめとする遺跡全体の実態把握も含めたうえでの判断が必要であり、今後更に検討していくべき課題であるといえる。なお、今回の調査地からは16世紀末~18世紀代の遺物や溝跡等の遺構が出土、検出されており、周辺には近世の生活域も存在していたと判断され、古代以降の地域の歴史的変遷の一部も明らかになったといえる。

（註1）長岡遺跡出土の須恵器、赤褐色土器の形態（法量数値）や製作技法等は、秋田城跡出土の土器資料とはほぼ一致しており、その年代比定は、下記文献に示す秋田城跡出土土器基準資料と編年に基づいて行った。

（註2）秋田城跡調査事務所では、赤褐色土器の呼称と環A・Bの分類については、酸化炎焼成、非内墨、ロクロからの切り離し回転、静止糸切りのものを赤褐色土器とし、環類の底部から体部下端及び下半にかけてケズリ調整を施すものを环B、無調整のものを环Aとしている。

（註3）周辺遺物の層相に部分的にても使用された可能性も含め、出土した瓦類の使用状況や出土の背景については明確ではない。①のタイプは下記秋田城跡関係文献によれば、秋田城跡創期焼地盤の粗根瓦、その後の補修瓦等としての使用があり、8世紀第2四半期から9世紀前半に位置づけられる。②について本稿では秋田城跡における従来の出土例や共伴遺物の年代等から8世紀末以降と考えたが、年代的にやや古く8世紀第4四半期~9世紀第1四半期とする見解もある（佐川1999年）。

（註4）ムシロ痕を残す甕や鍋の幅広のミガキ調整については、技法的にケズリ調整に近い要素を持つものか今後検討を要する。

（註5）ムシロ痕を残すタイプの甕や鍋については、9世紀以降の東北地方の近郊部において、須恵器・ロクロ製作技法や律令の土器様式の影響を受けて在地系・蝦夷系工人により生み出された在地系土器であるという見解がある（菅原2000年）。

引用参考文献

秋田市教育委員会『昭和47年~平成12年度秋田城跡発掘調査概報』 1973年~2001年

秋田市「第7章秋田城跡の発掘調査 第三節出土遺物 -- 土器・陶磁器、九 秋田城跡出土土器の編年」「秋田市史第七巻 古代史料編」 2001年

伊藤武士「秋田城周辺須恵器窯の動向について」『秋田考古学』46 秋田考古学協会 1998年

奈良修介・富樫泰時・鶴賀勝太「羽白目遺跡調査報告」『秋田考古学』25 秋田考古学協会 1970年

高橋一太「羽白目遺出土の布目瓦について」『秋田考古学』25 秋田考古学協会 1970年

秋田県昭和町教育委員会『羽白目遺跡（調査概報）』 1990年

小松正夫「秋田城の出土瓦について」『東北考古学の諸問題』東出版・寧楽社 1976年

佐川正敏「古代出羽秋田城の積み上げ技法成形台一本造り丸瓦の研究」『東北学院大学東北文化研究所紀要』31 1999年

菅原邦夫「平安時代における蝦夷系土器の南下~蝦夷の移住をめぐって~」『阿部正光君追悼集』阿部正光君追悼集刊行会 2000年

古代の土器研究会「律令的土器様式の西・東3 施釉陶器」古代の土器研究会第3回シンポジウム 1994年

九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年~九州近世陶磁学会10周年記念~』 2000年

第IV章 長岡遺跡のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田市下新城長岡に所在する長岡遺跡は、秋田市北部を流れる新城川中流域の沖積低地上に立地する。本遺跡の位置する低地の標高は約11mであり、遺跡の北側の背後には第四紀更新世の海成層である潟西層により構成されている丘陵地（藤岡ほか、1977）が広がっている。今回発掘調査では、現耕作土層の下位に堆積する青灰色粘土層より古代および近世の遺構が検出され、縄文時代と古代、近世の遺物が出土している。遺構は、掘立柱建物跡や土坑、溝跡など多数が確認されているが、そのほとんどは出土遺物等から8世紀末～9世紀代を中心とする平安時代のものと考えられている。

今回の分析調査では、平安時代の溝跡の埋積土より採取された砂質の堆積物が火山灰（テフラ）であるかどうかを検証し、テフラであれば既存の資料との比較から給源火山と噴出年代を特定し、遺構の年代について考察する。

1. 試料

試料は、調査地南側の調査区B区で検出された、1号溝跡No1ベルトの埋積土より採取された粘質砂1点である。発掘調査所見によれば、1号溝跡は、幅約60cm、深さ15～20cm、長さ約28mの素掘の溝であり、東から西へ流れ、1号河川跡につながっている。出土遺物などから、1号溝跡の時期は9世紀以後と考えられているが、溝跡として機能した下限の年代は不明とされている。

1号溝跡の埋積土は、上位より第1層から第3層まで分層されており、第1層は砂質土～粘土、第2層は粘質土、第3層は粘土と記載されている。試料が採取されたのは、第1層である。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた纖維束状のものとする。

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

砂分中には、微量の軽石と多量の火山ガラスが確認された。軽石は、最大径1.5mm程度、白色～灰白色を呈し、非常に細かなスponジ状の発泡をしている。火山ガラスは、細砂～極細砂径、無色透明で塊状の軽石型が多く、少量の纖維束状の軽石型とバブル型が含まれる。

火山ガラスの屈折率は1.497～1.504（モードは1.499～1.502）である（図1）。

4. 考察

分析結果で述べた軽石および火山ガラスの特徴と、長岡遺跡の地理的位置および1号溝跡の年代観を考慮し、これまでに研究された東北地方におけるテフラの產状（例えば、町田ほか（1981：1984）、Arai et al. (1986)、町田・新井（1992）など）との比較から、今回検出された軽石および火山ガラスは十和田aテフラ（To-a）に由来すると考

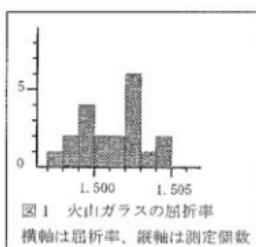


図1 火山ガラスの屈折率

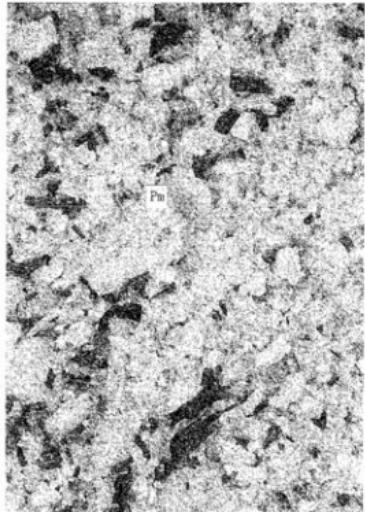
横軸は屈折率、縦軸は測定個数

えられる。1号溝跡埋積七第1層におけるTo-aの産状は、若干搅乱を受けてはいるが、溝が廃棄され埋積がかなり進んだ頃に降灰堆積したものであることを示唆する。ここで、To-aの噴出年代については、A.D.915年（町田・新井、1992；早川・小川、1998）とされているから、1号溝跡は10世紀初頭にはすでに廃棄されており、しかも廃棄からある程度（第3層と第1層が堆積する程度）の時間が経過していた可能性が高い。

引用文献

- Arai,F. ·Machida,H. ·OKumura,K. ·Miyauchi,T. ·Soda,T. ·Yamagata,K (1986) Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II-Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,p.223-250.
- 藤岡一男・大沢あつし・高安泰助・池辺 稔（1982）秋田地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、75p. 地質調査所。
- 古澤 明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別、地質学雑誌、101, p.123-133.
- 早川由紀夫・小山真人（1998）日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－、火山、43,p.403-407.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山アトラス、276p.東京大学出版会。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ、科学、51, p.562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－、渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p.865-928.

図版1 軽石・火山ガラス



1. To-a の軽石

(B区1号溝跡No.1ベルト埋土1層)

Pm:軽石。

1mm



2. To-a の火山ガラス

(B区1号溝跡No.1ベルト埋土1層)

0.5mm



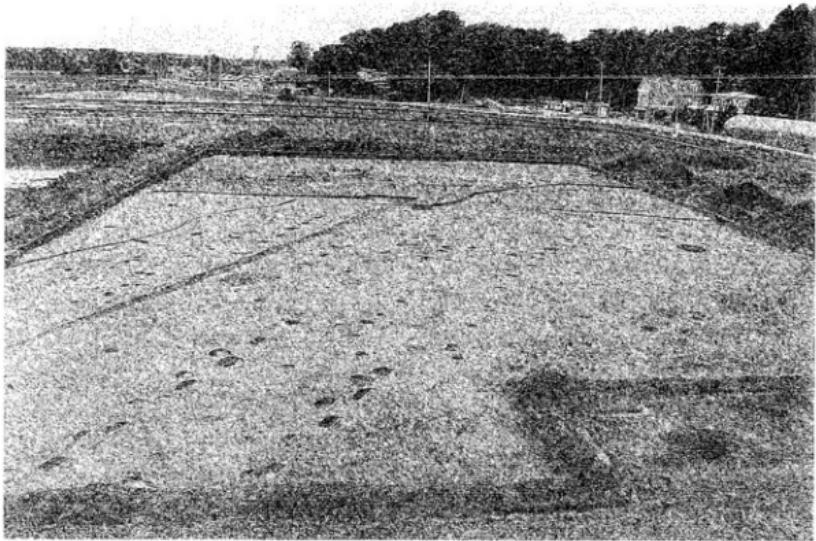
調査地（A区）全景

図版1

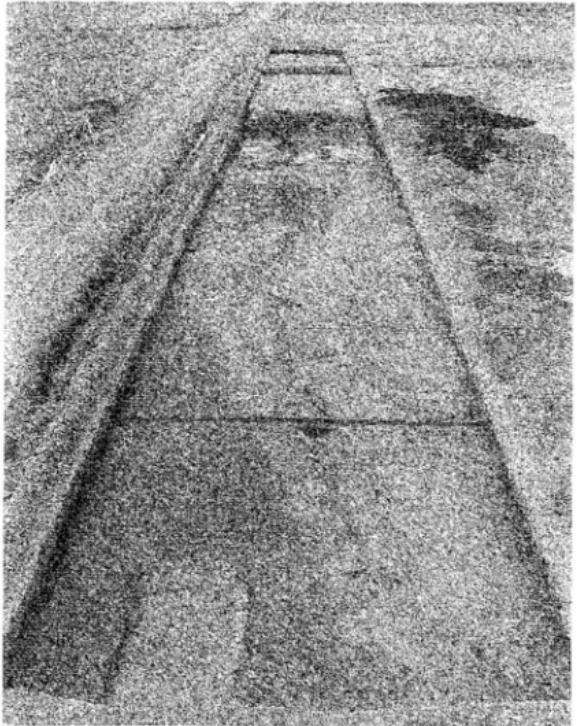


調査地（A区）全景（上：南から・下：東から）

図版2



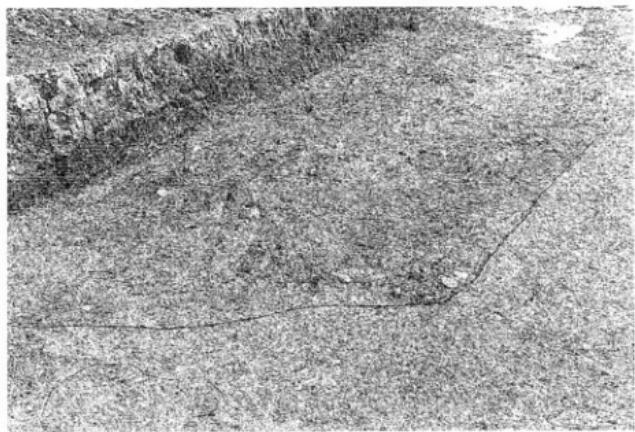
A区全景（東から）



B区全景（東から）



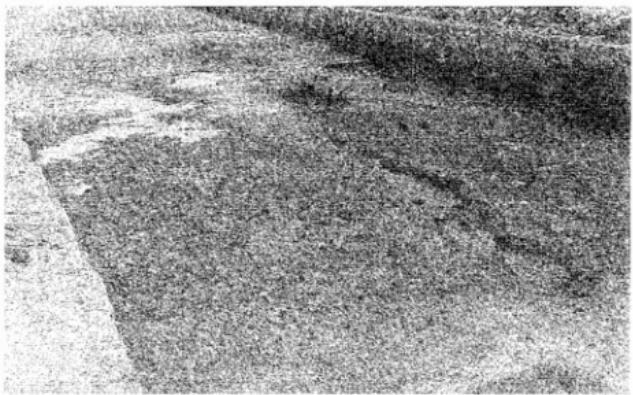
1号河川跡検出状況（北西から）



1号河川跡上層面遺物出土状況（西から）



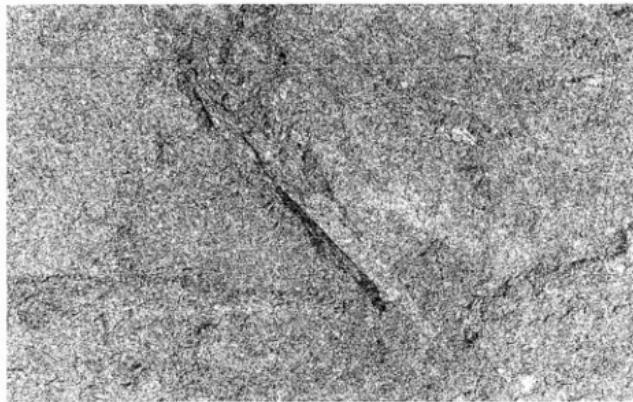
1号河川跡
完掘状況
(北西から)



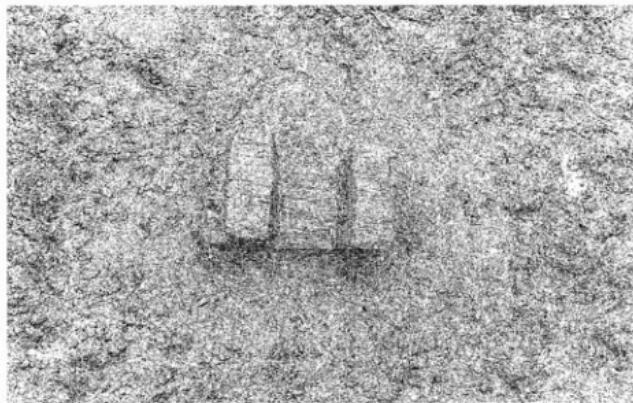
1号河川跡
完掘状況
(西から)



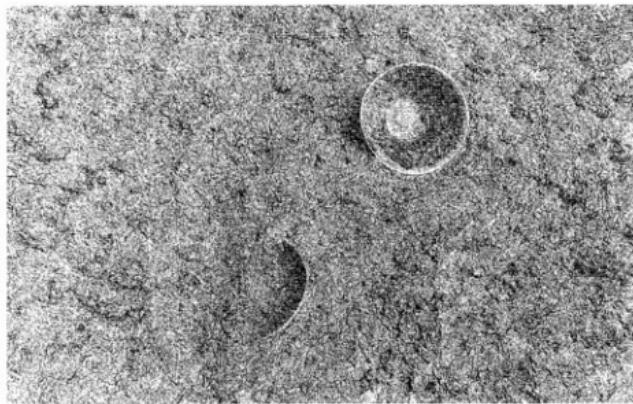
1号河川跡
西岸南壁土層断面
(北から)



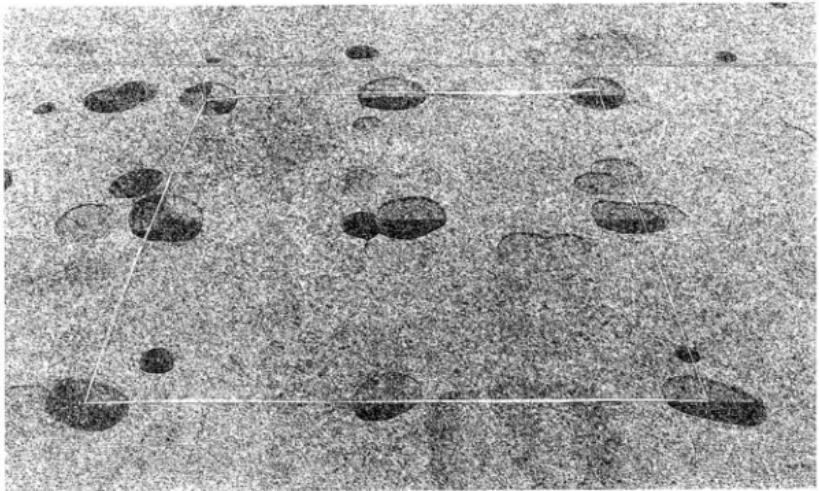
1分河川跡西岸
(4号溝跡)
刀子出土状況



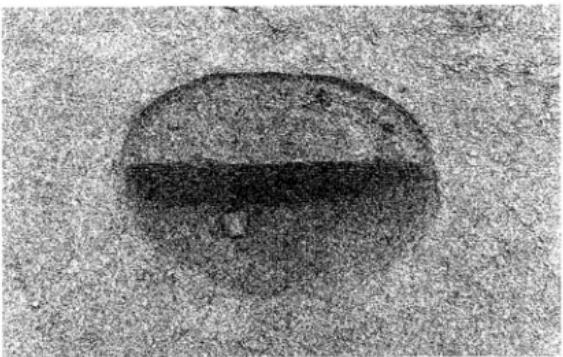
1号河川跡西岸
下駁出土状況



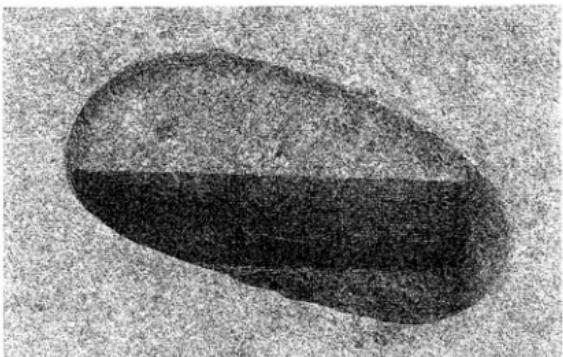
1号河川跡西岸
土器出土状況



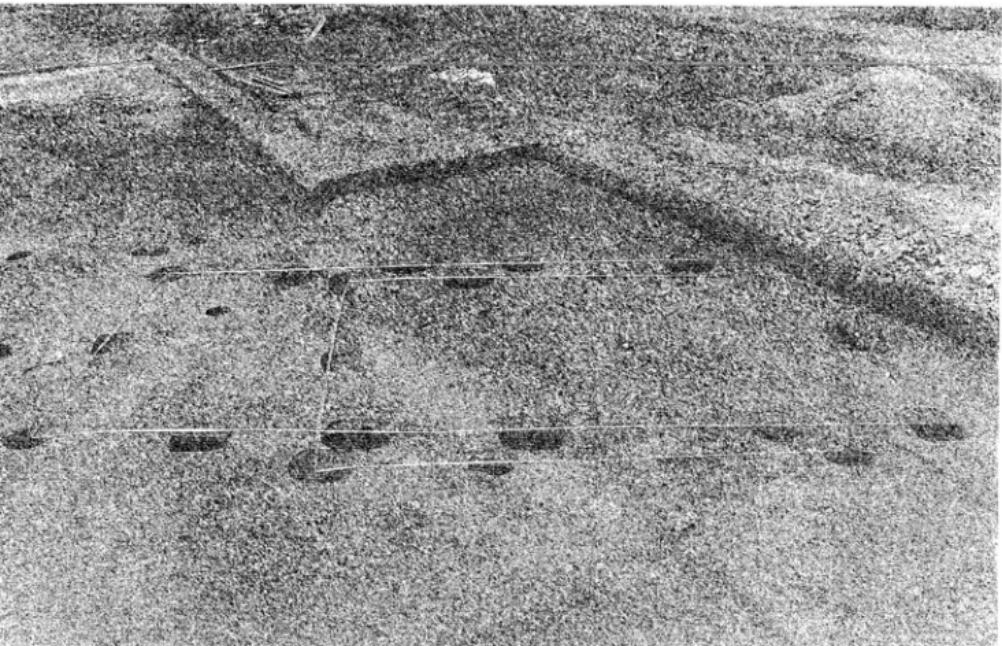
1号建物跡
(南から)



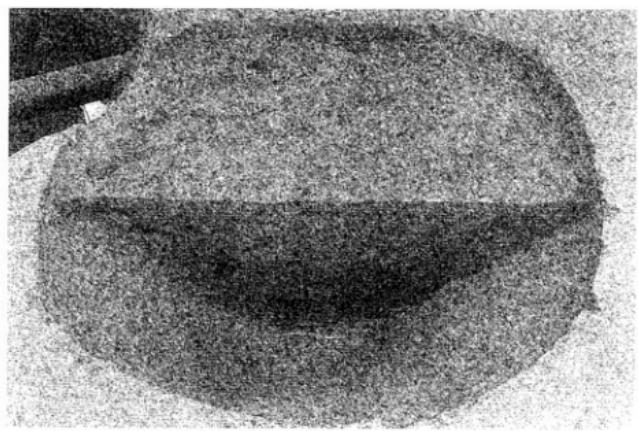
1号建物跡柱掘り方
土層断面



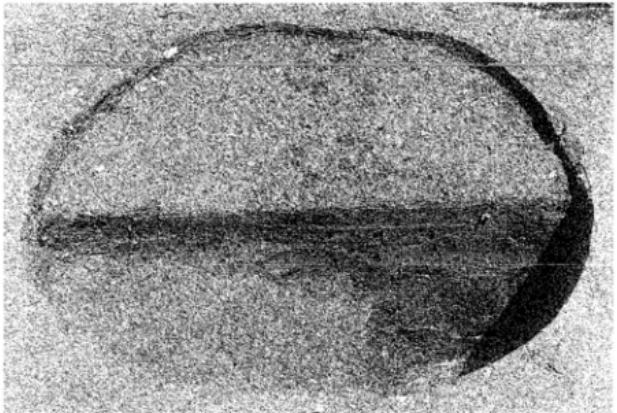
1号建物跡柱掘り方
土層断面



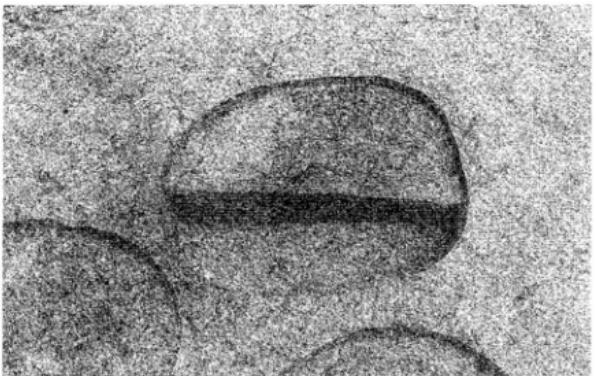
2号建物跡・3号建物跡（南西から）



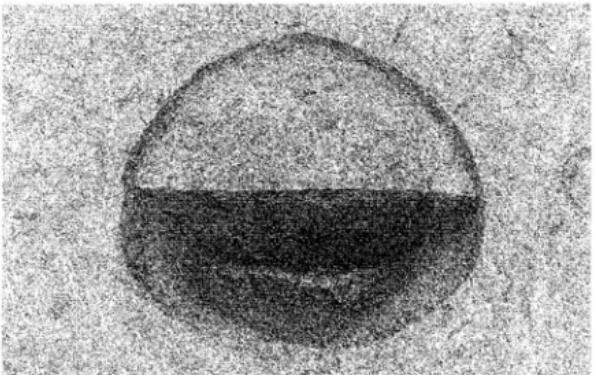
2号建物跡 柱掘り方上層断面



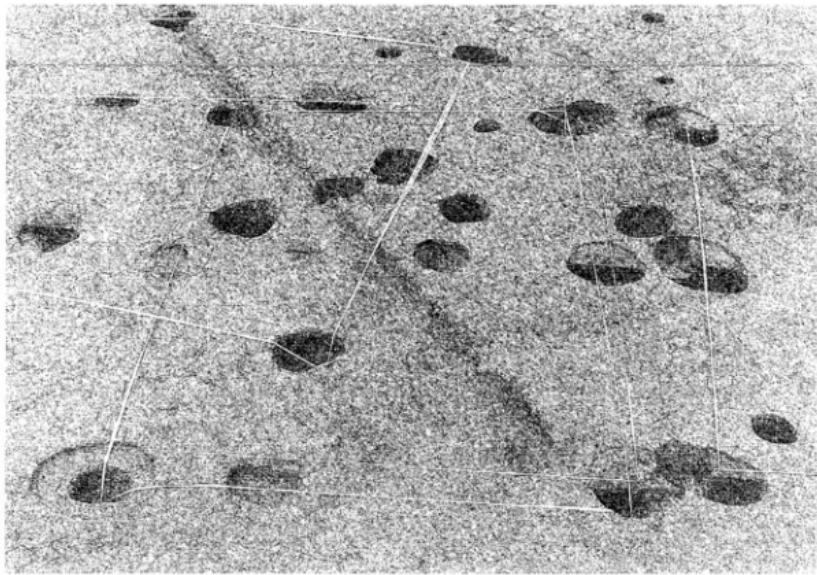
2号建物跡柱掘り方
土層断面



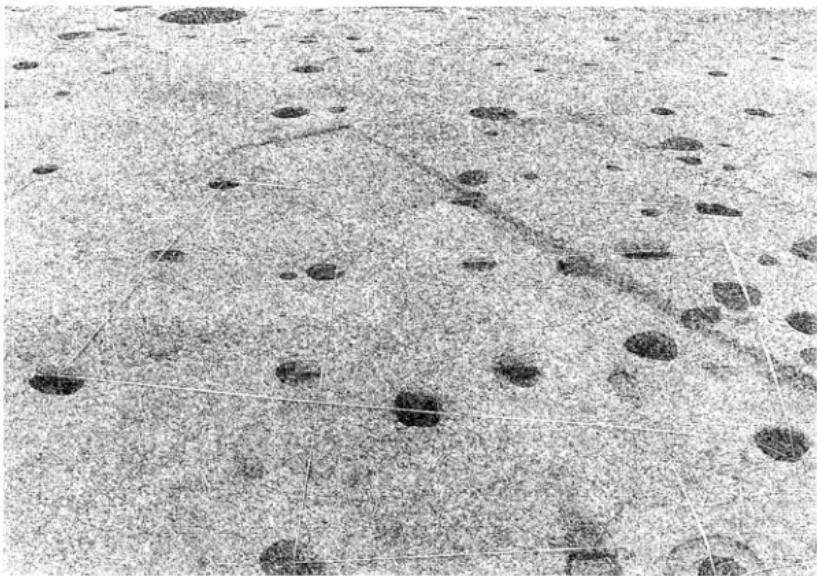
3号建物跡柱掘り方
土層断面



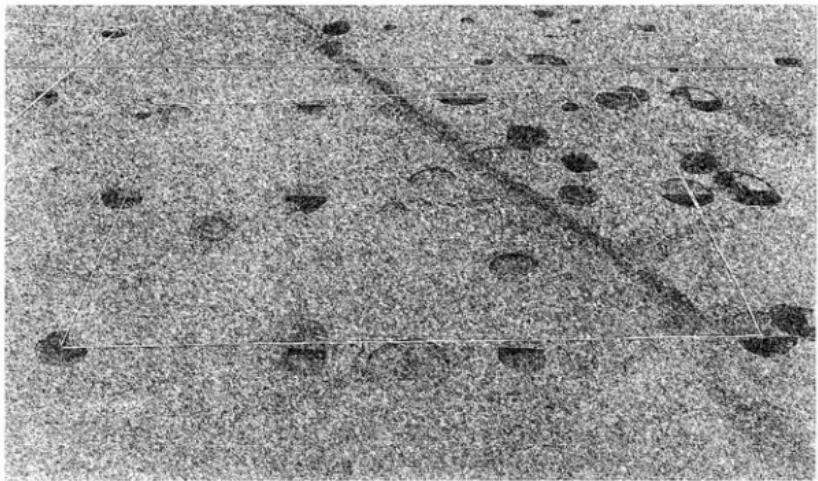
3号建物跡柱掘り方
土層断面



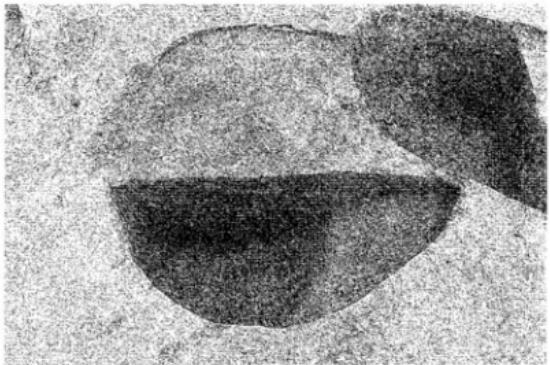
4号建物跡（南から）



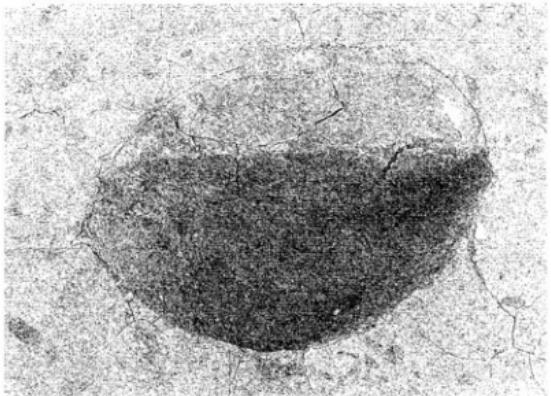
7号建物跡（南から）



5号建物跡
(南西から)



5号建物跡柱掘り方
土層断面



5号建物跡柱掘り方
土層断面